

若狭における弥生時代前期の遺跡

—小浜市丸山河床遺跡の出土資料—

平成19～22年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）による研究成果

2011年3月

研究代表者 伊藤淳史
(京都大学文化財総合研究センター)

例 言

- ・本書は、伊藤淳史を研究代表者として平成19～22年度に日本学術振興会より交付を受けた科学研究費補助金基盤研究（C）「弥生時代集落の広さと居住人口復元に関する基礎的研究」（課題番号：19520654）による研究成果の一部を刊行するものである。
- ・本書の研究成果については、杉山拓巳（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）、網谷克彦（敦賀短期大学）および福井県立若狭歴史民俗資料館の協力を得た。研究経緯については本文中を参照されたい。
- ・本書のうち、「3.2被熱変形土器について」の項目は杉山、それ以外を伊藤が執筆し編集した。遺物写真はおもに杉山が撮影し、伊藤が一部を補い調整した。
- ・本研究課題全体の概要と、本書掲載以外の研究成果については、義務づけられた所定の電子様式として日本学術振興会に提出予定であり、国立情報学研究所の科学研究費補助金データベース（<http://seika.nii.ac.jp/>）等を参照されたい。

若狭における弥生時代前期の遺跡

—小浜市丸山河床遺跡の出土資料—

目 次

1. はじめに	1
2. 出土遺物について	3
2.1 土 器	3
2.2 木 器	20
3. 考 察	21
3.1 出土土器の編年的・系統的な問題	21
3.2 被熱変形土器について	23
3.3 若狭および近畿北部地域における縄文晩期末～弥生前期遺跡の動態	24

挿図目次

図1 若狭湾周辺の突帯文土器・遠賀川式土器出土遺跡	2
図2 丸山河床遺跡の位置	2
図3 弥生時代前期の土器（1）	6
図4 弥生時代前期の土器（2）	7
図5 弥生時代前期の土器（3）	8
図6 弥生時代前期の土器（4）	9
図7 弥生時代前期の土器（5）	10
図8 弥生時代前期の土器（6）	11
図9 弥生時代前期の土器（7）	12
図10 弥生時代前期の土器（8）	13
図11 弥生時代前期の土器（9）	14
図12 弥生時代前期の土器（10）	15
図13 突帯文・条痕文系土器	17
図14 木製品	19
図15 若狭および近畿北部の縄文晩期末～弥生前期遺跡（その1・若狭）	28
図16 若狭および近畿北部の縄文晩期末～弥生前期遺跡（その2・丹後、北丹波）	29
図17 若狭および近畿北部の縄文晩期末～弥生前期遺跡（その3・但馬）	30

表 目 次

表 1	遠賀川式土器の部位別出土点数	4
表 2	地域・時期別確認遺跡数	25
表 3	若狭および近畿北部の縄文晩期末～弥生前期遺跡	31

図版目次

図版 1	1 小浜平野と丸山河床遺跡	2 丸山河床遺跡付近の近況
図版 2	1 調査地付近全景	2 河床内堆積状況（その 1）
	3 河床内堆積状況（その 2）	4 河床内堆積状況（その 3）
	5 遺物出土状況（その 1）	6 遺物出土状況（その 2）
図版 3	弥生時代前期の土器（その 1）	
図版 4	弥生時代前期の土器（その 2）	
図版 5	弥生時代前期の土器（その 3）	
図版 6	弥生時代前期の土器（その 4）	
図版 7	1 弥生時代前期の土器（その 5）	2 弥生時代前期の土器（その 6）
図版 8	弥生時代前期の土器（その 7）	
図版 9	弥生時代前期の土器（その 8）	
図版 10	弥生時代前期の土器（その 9）	
図版 11	弥生時代前期の土器（その 10）	
図版 12	1 突帯文・条痕文系土器	2 被熱変形土器片
図版 13	木製品	

若狭における弥生時代前期の遺跡

—小浜市丸山河床遺跡の出土資料—

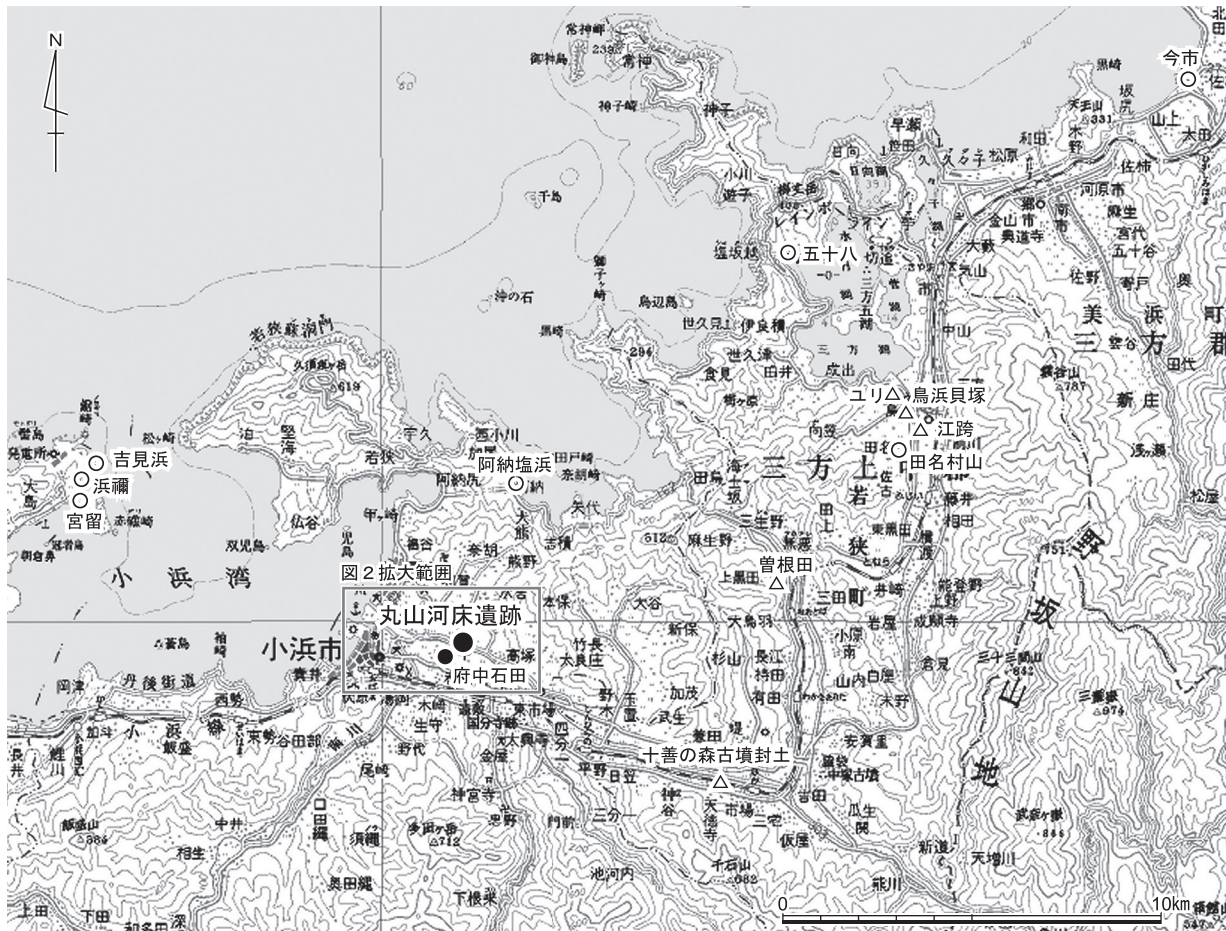
1. はじめに

経緯と経過 丸山河床遺跡は、昭和62年（1987）11月、建設省（当時）による北川河川改修工事の右岸河床掘削中に弥生前期の土器・木器などがまとまって発見され、はじめて存在が知られた遺跡である。同月25日～12月5日にかけて、当時福井県立若狭歴史民俗資料館に勤務していた網谷克彦・畠中清隆氏を担当に急遽緊急調査（40m²）が実施され、遺物の回収と出土状況の記録が作成された〔福井県埋文セ1988 a pp.60～61〕。その後、出土資料については、網谷氏らにより接合・実測など基礎的な整理作業が実施され、伊藤も加わりながら、報告書作成に向けて資料点数の計量や実測図の修正、レイアウト、製図などの作業を断続的におこなってきた。この間、『小浜市史』通史編に代表的な資料を抽出して掲載している〔小浜市史編纂委員会編1992 pp.51～57〕。

丸山河床遺跡は、若狭における代表的な弥生前期遺跡であるばかりでなく、日本海側において遠賀川式土器がまとまって出土する遺跡の最東端に位置するという、きわめて重要な意義もっている。また、ここ数年の間に、隣接した府中石田遺跡をはじめとして弥生時代遺跡の大規模な調査が若狭でも相次ぎ、それらの報告と評価を進めていく上でも、この遺跡の資料内容を細かく明らかにしておくことは、喫緊で重要な課題であると思われる。よって今回、2007～2010年度に伊藤に交付された科学研究費補助金の研究の一環として、あらためて詳細な資料報告を実施することとした。一連の作業には、遺物写真の撮影をはじめとして杉山拓巳（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）の多大な助力を得た。なお、出土資料については、小浜市指定文化財に一括指定されており、福井県立若狭歴史民俗博物館において一部が展示されているほか、小浜市教育委員会が保管している。

位置と立地（図1・2、図版1・2） 丸山河床遺跡は、福井県小浜平野の中心部を西流して若狭湾に注ぐ北川の、河口から約2.5kmあまりに位置している。地図上で確認する限り、現在の地籍名では小浜市次吉である。周囲の水田の地表面標高は2m程度だが、河川面は海拔1m前後で、遺物が出土したのはそれより下部の海拔-1.0～-2.0mとされる。当時の記録によれば、遺物包含層である粘質土層は、幾層もの斜位のブロックとして砂層と互層になっており、明らかに河川による流れ堆積の状況を示していた（図版2-2～4）。しかしながら、この粘質土ブロック内から大量に出土する弥生前期の土器は全く摩滅しておらず、非常に近接して遺跡が所在していたことをうかがわせる。

この点で注意されるのは、丸山河床遺跡の南側一帯にひろがる府中石田遺跡の調査成果である。舞鶴若狭自動車道建設にともない、福井県埋蔵文化財調査センターが2005～2007年度の3ヶ年にわたり発掘調査を実施し、弥生中～後期の多数の方形周溝墓や住居址などが検出されているほか〔福井県埋文セ 2006・2007・2008〕、前期の土器を出土する土坑も少数確認されているという（杉山拓巳の教示による）。丸山河床遺跡の調査地点とは300m程度を隔てるにすぎない。したがって、これら両遺跡の東方一帯に中心をもつ弥生前期遺跡が所在していて、府



● 遠賀川式土器と突帯文土器の双方が出土している遺跡 ○ 遠賀川式土器の出土遺跡 △ 突帯文土器の出土遺跡

図1 若狭湾周辺の突帯文土器・遠賀川式土器出土遺跡 縮尺1/20万



図2 丸山河床遺跡の位置 縮尺1/25000

中石田遺跡の前期遺構群はその西縁部が及んだもの、弥生時代以降の蛇行流路が抉り取った遺物包含層の再堆積が丸山河床遺跡、とみたい(図2参照)。府中石田調査区の北縁部は流路により流失していたという県埋文センターの所見からも、この想定は裏付けられよう。北川の流れが固定される以前の小浜平野には、沖積低地を形成する無数の流路が存在したことは容易に想像される。こうした地形環境を考慮すると、ここに想定される弥生前期遺跡というのは、府中石田地点までにおよぶ広大な面積を地続きで占めるようなものではなく、小規模な複数の単位が微高地上を選んで散在しているような状況が想像される。

2. 出土遺物について

今回の調査では、終了時の報告では破片にして約1000点の遺物が出土したとされる。整理後の現状では薄型のコンテナ(40cm×60cm×10cm)にして約45箱分であり、うちほとんどが弥生前期の遠賀川式土器である。それ以外の出土遺物としては、

- a：縄文前期(北白川下層Ⅲ式ないし大歳山式)の有文土器片1点
- b：縄文晩期～弥生前期併行期の突帯文土器および条痕文土器の可能性ある口縁部片3点
- c：木製品2点(高杯脚部、および斧柄)
- d：ヒョウタン果皮1個体分
- e：弥生後期～古墳中期にかけての土器片微量(1箱未満)

があった。これらのうち、aとeは摩滅の著しい小片で占められている。ここでは、主体となる遠賀川式土器と、それとの関連が重視される人工遺物のbとcを報告する。なお石器・石製品類は、剥片も含めて全く確認されていない。

2.1 土 器(図3-1～161, 図版3～12, 表1)

遠賀川式土器 おおむね器種・部位毎に説明する。以下本文中の()内の数字は挿図中の土器番号を示す。特徴的な部位や施文のある破片の出土点数はカウントし、結果を表1に示しているので参照されたい。

なお、今後の実物との対照の便宜を図るため、遺物本体に注記されている登録番号を挿図中の各個体左下に明朝体数字で付記している。

壺の口縁～頸部(1～16) 頸部から上の器形は、短く外反して口縁に至る形態のものが多く、口唇の端部は、ゆるやかな面をもつものと丸く収めるものの双方があり、無文が多数を占めるなかで、篋刻み(5)や沈線(9・11・12)の装飾が認められる。(6)は口縁内面、(12)は頸部の削出突帯上に、沈線と竹管状工具の円形刺突列を組み合わせた特異な文様をもつ。(16)は、断面三角形の不安定な形状の貼付突帯を1帯、頸部にめぐらしている。

多くの個体の最終器面調整は磨きを基本とするが、この(16)のように、省略されて刷毛目調整がそのまま残る個体も散見される。

壺の頸部(17～35) 頸部付近のみの破片は多くないが、口縁部や胴部も有している破片もあわせて頸部の装飾法についてみると、篋描沈線・削出突帯・貼付突帯の3種を単独ないし一部併用している。頻度が最も高いのは篋描沈線のみによるもので、5条までの条数が主体となる。削出突帯および貼付突帯は、頸部についてはいずれも採用頻度は少ない。多くの削出突帯

の場合、篋描沈線を施文した後に、片側を刷毛の原体によって強く押さえつけたり、横位方向に強く研磨することによって、高低差を造り出す手法に依っていることが確認される。突帯上に1～2条程度の篋描沈線を施すこともあり、さらに円形刺突列を加える(12)については上述した。貼付突帯の場合も篋描沈線文と併用されるものがあり、とりわけ(31)や(33)は、貼り付けた粘土帯上にそれぞれ1条および2条の沈線を施して、見かけ上は2帯ならびに3帯の突帯となるようにしている。また突帯上には刻みを施すものとそうでないものがある。前者の場合、多くは篋先による刻みだが、(35)は棒状工具の側面を押捺することにより円錐状の突起列を造り出すものである。(34)は「の」字状の浮文を貼り付ける特異な突帯である。ま

表1 遠賀川式土器の部位別出土点数

・壺形土器頸部および胴部

条数	部位と装飾								計
	頸部				胴部				
	沈線のみ	削出+沈線	貼付突帯刻有	貼付突帯刻無	沈線のみ	削出+沈線	貼付突帯刻有	貼付突帯刻無	
0		2				4			6
1	1	1			5	8	1	1	17
1+α	2	2	4	1	6	4	4	5	28
2				1	3	18	7	2	31
2+α	5				14	2	3	1	25
3	3		1		4	14	1		23
3+α	2	1			10	6	1	1	21
4	1				7	2	1		11
4+α	1				3		1		5
5	4				3	1			8
5+α					2	1			3
6					7				7
6+α	1				1				2
7						1			1
7+α					3				3
8					1				1
8+α					1				1
計	20	6	5	2	70	61	19	10	193

・壺形土器口縁

装飾無	装飾有			総計
	刻み	沈線	刻+沈線	
51	5	3	2	61

・鉢形土器口縁(上段) 胴部外面調整(下段)

装飾無			装飾有		
			刻み		
17			2		
磨き	刷毛	なで	磨き	刷毛	なで
8	8	1		2	

・底部

壺	甕	不明	計
45	31	14	90

・甕形土器口縁および頸部

頸部沈線条数	口縁装飾			計
	刻み有り	刻み無し	口縁欠	
0	4	20	2	26
段状		1		1
1	8	2	5	15
1+ α		1	4	5
2	5	5	3	13
2+ α	2	1	5	8
3	6	4	6	16
3+ α			4	4
4				0
4+ α			1	1
5	1			1
5+ α			1	1
不詳	17	21		38
計	43	55	31	129

た、多くの貼付突帯の施文位置には先行して下書きの篋描沈線が施されていることが確認されるが、先述した(16)の貼付突帯には確認されない。この断面三角形の無刻突帯は、指頭による貼付痕が明瞭に残る粗雑なつくりである点も、きわめて特徴的である。

器面の最終調整は、横位の丁寧な研磨を基本としているが、(22)のように例外的に縦位の調整も確認される。施文部位を中心に磨き不十分で先行する縦位の刷毛調整が残存している事例は多数ある。

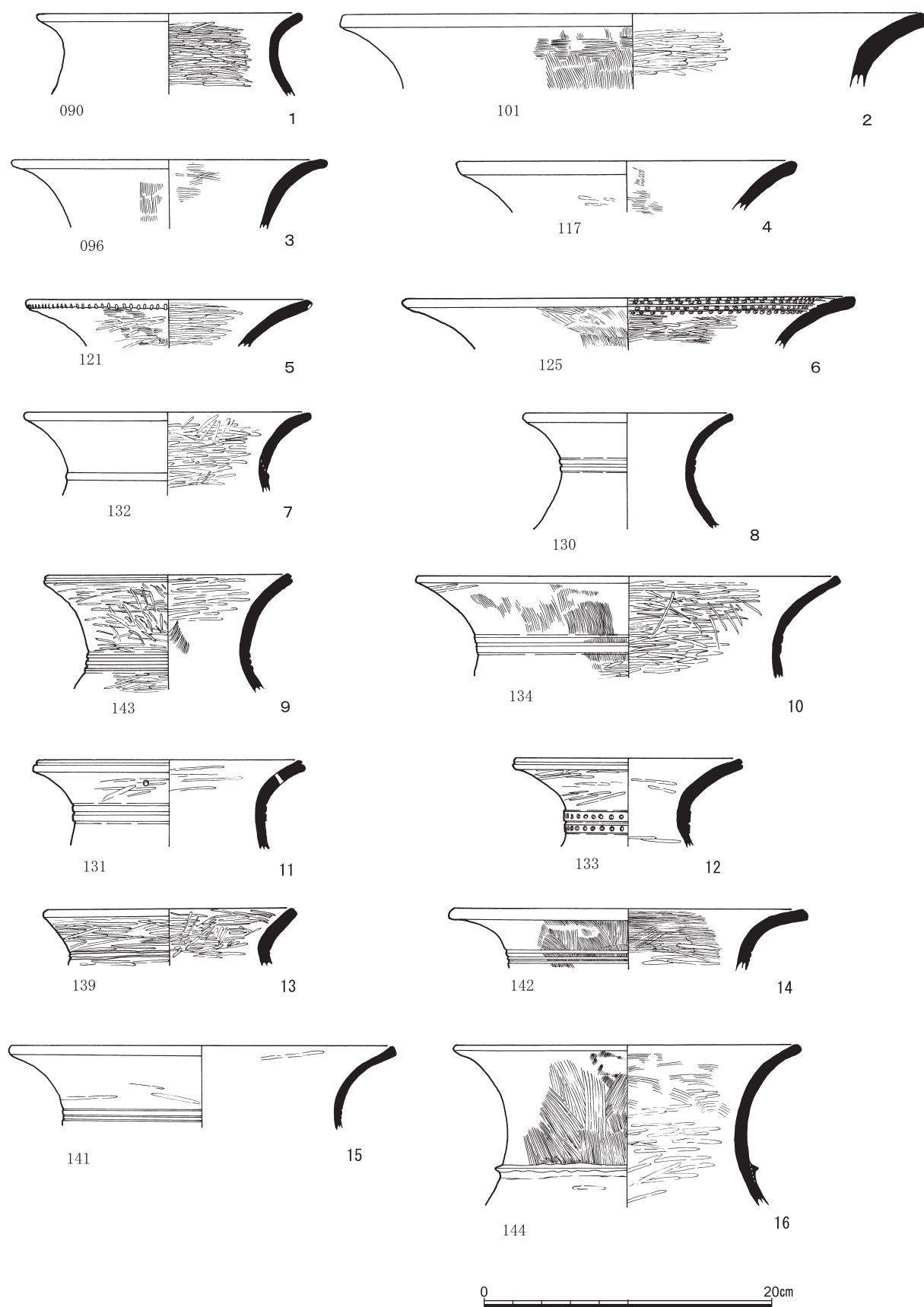
壺の胴部(36～87) 頸部と胴部最大径部の中間付近を文様帯とするのが基本で、装飾としては、削出突帯と沈線を組み合わせるもの(36～48)、篋描沈線のみで施文するもの(49～63)、貼付突帯を主体とするもの(64～73)などがある。削出突帯の技法については、頸部に施されている場合と同様だが、明確に低められているのは上側(頸部側)で、下側(胴部側)は、ただ篋磨きが及んでいるだけなのか意識して段差を造り出しているのか曖昧なものも多い。突帯上の篋描沈線は、ほとんどが4条程度以内におさまるようである。しかし、沈線のための施文の場合は、5条以上のものも一定量認められる。貼付突帯については、特徴は多様であるが、条数は3条程度までにおさまり、多条化の傾向はうかがえない。(69)～(73)の個体は、貼付突帯と篋描沈線が部位を違って共存しているもので、(71)については沈線文带上側を削出突帯風に低めている。

(74)以下は、特徴的な文様をもつ個体を集めた。

(74)は、胴部上半に沈線文帯、下半に羽状に刻む貼付突帯3条をめぐらすが、両者をつなぐように垂下する繊細な直線4本が記号風に描かれている。(75)は、胴部に5条の篋描沈線をめぐらしたのち、2～3条目間および4～5条目間に、互いに羽状となるように細かな刻みを施している。(76)は、沈線間に棒状具先端による円形の刺突列を施している。

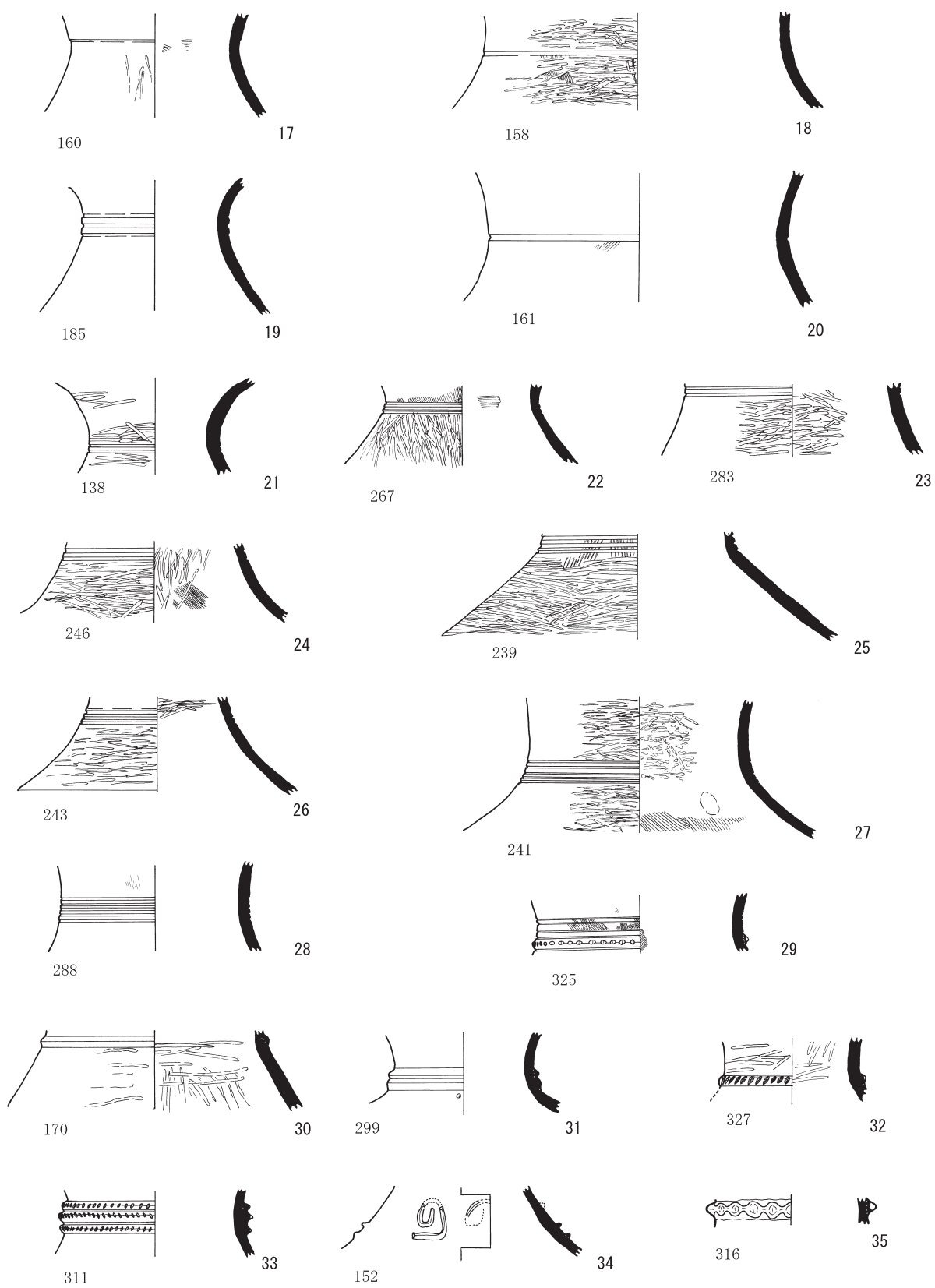
(77)・(78)・(86)・(87)は、「綾羅木系文様」などと呼ばれる日本海沿岸域の遠賀川式土器に特徴的な羽状モチーフの装飾。この種の文様の土器片は呈示したものが出土したすべてである。(77)は、胴部上半の破片で、3条の篋描沈線文帯の上端を削出突帯風に低めて段差を造出しており、その下側をひろく文様帯とする。浅いが細く鋭い沈線によるもので、2条の直線で縦位と横位に区画した内部を埋めるように、それぞれに並行した羽状文を配している。(86)も沈線文帯の下側を文様帯とする胴部上半の破片で、類似の意匠で飾った可能性もあるが、残存する範囲内では縦横の区画線は確認されない。また、最上段の斜線が左下がりであるなど、モチーフに微妙な違いもある。(78)は、二枚貝の腹縁を刺突するものであり、横位の羽状文を構成する各線の内部には細かな鋸歯状の凹凸が確認される。胴部は下膨れ気味の形態となるように、刻目突帯2条を下端の最大径部付近にめぐらし、その上側を文様帯としている。(87)は篋描による横位羽状モチーフを施す胴部片。羽状を構成する斜沈線が短く、上記3例とはやや趣が異なる。

(79)は、同一個体とみられる複数の壺胴部片から器形を復元した。器表面は黒色を呈し、胴部の上下を複数条の貼付突帯で画したなかに、3条の篋描沈線によるおおぶりの弧状モチーフを配したとみられる。突帯は最低でも4条あり、胴部のものは剥離して下書きの篋描沈線のみが残っている。突帯上はこぶりのO字状に刻まれるが、右下がり斜位の刻目突帯と左下がり斜位のそれとが交互にめぐって、見た目は羽状を呈している。



* 明朝体の数字は土器登録番号

図3 弥生時代前期の土器(1) (1～16：壺形土器口縁) 縮尺1/4



0 20cm

* 明朝体の数字は土器登録番号

図4 弥生時代前期の土器(2) (17~35: 壺形土器頸部) 縮尺1/4

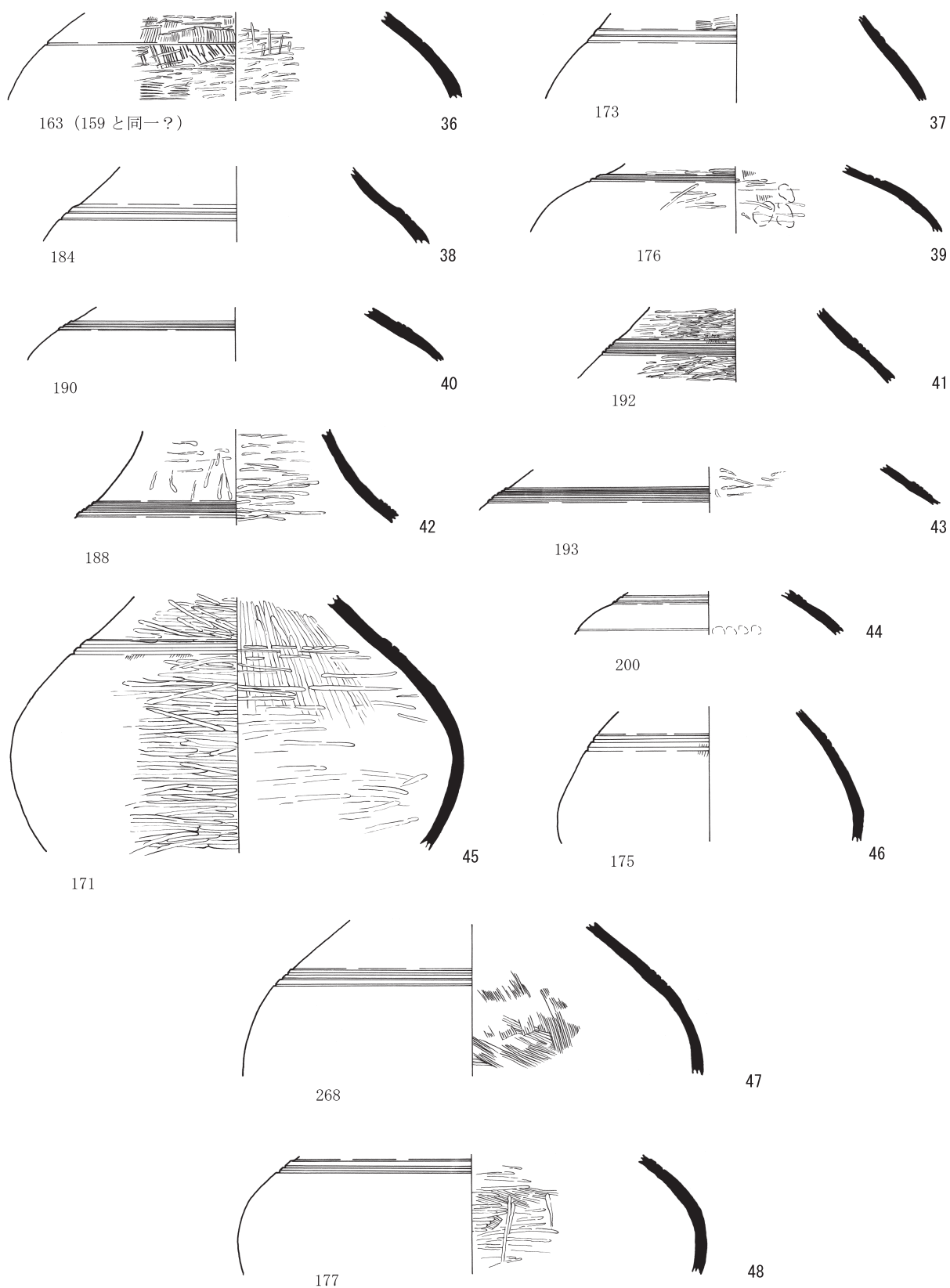
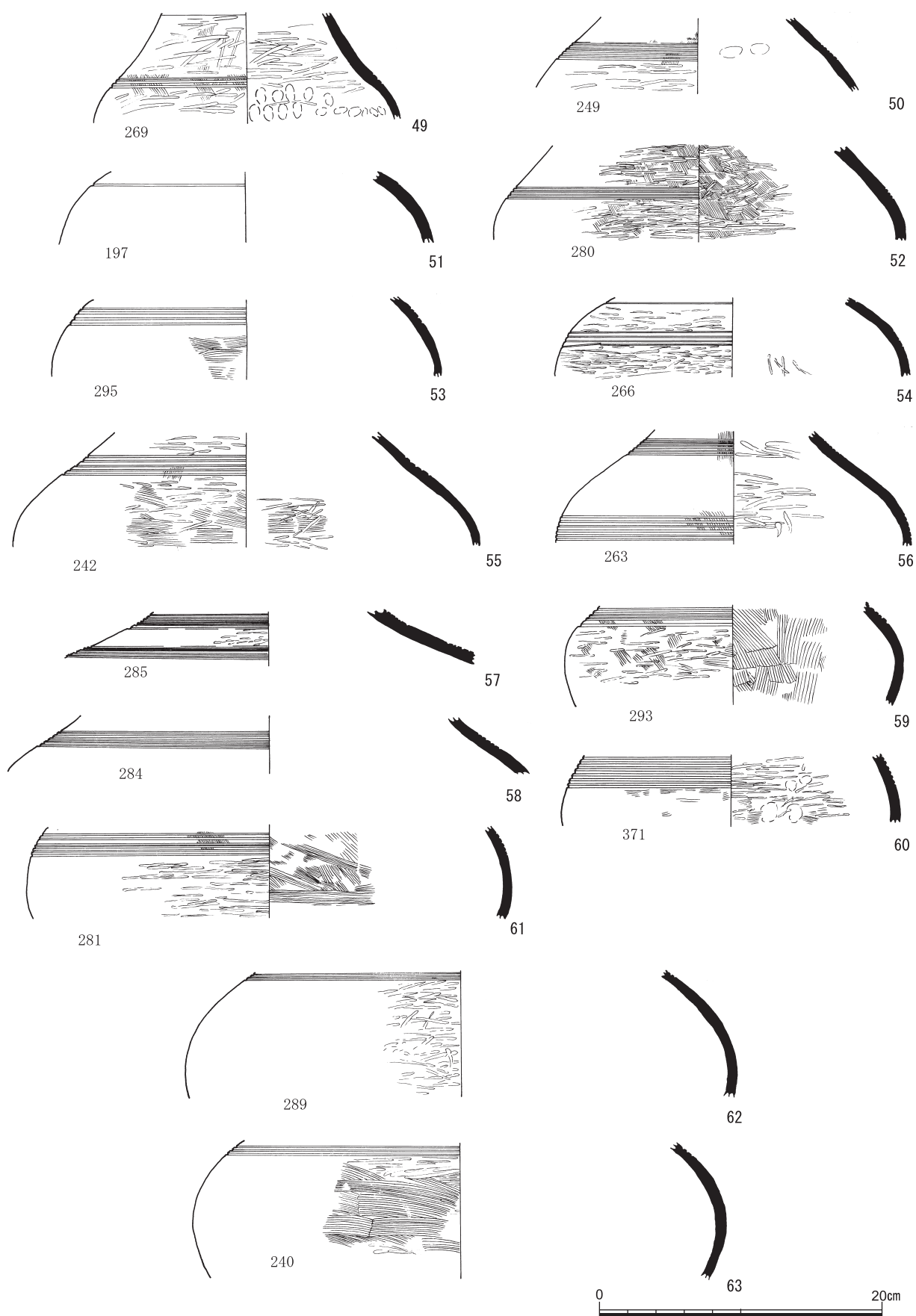


図5 弥生時代前期の土器(3) (36~48: 壺形土器胴部その1) 縮尺1/4



*明朝体の数字は土器登録番号

図6 弥生時代前期の土器(4) (49～63：壺形土器胴部その2) 縮尺1/4

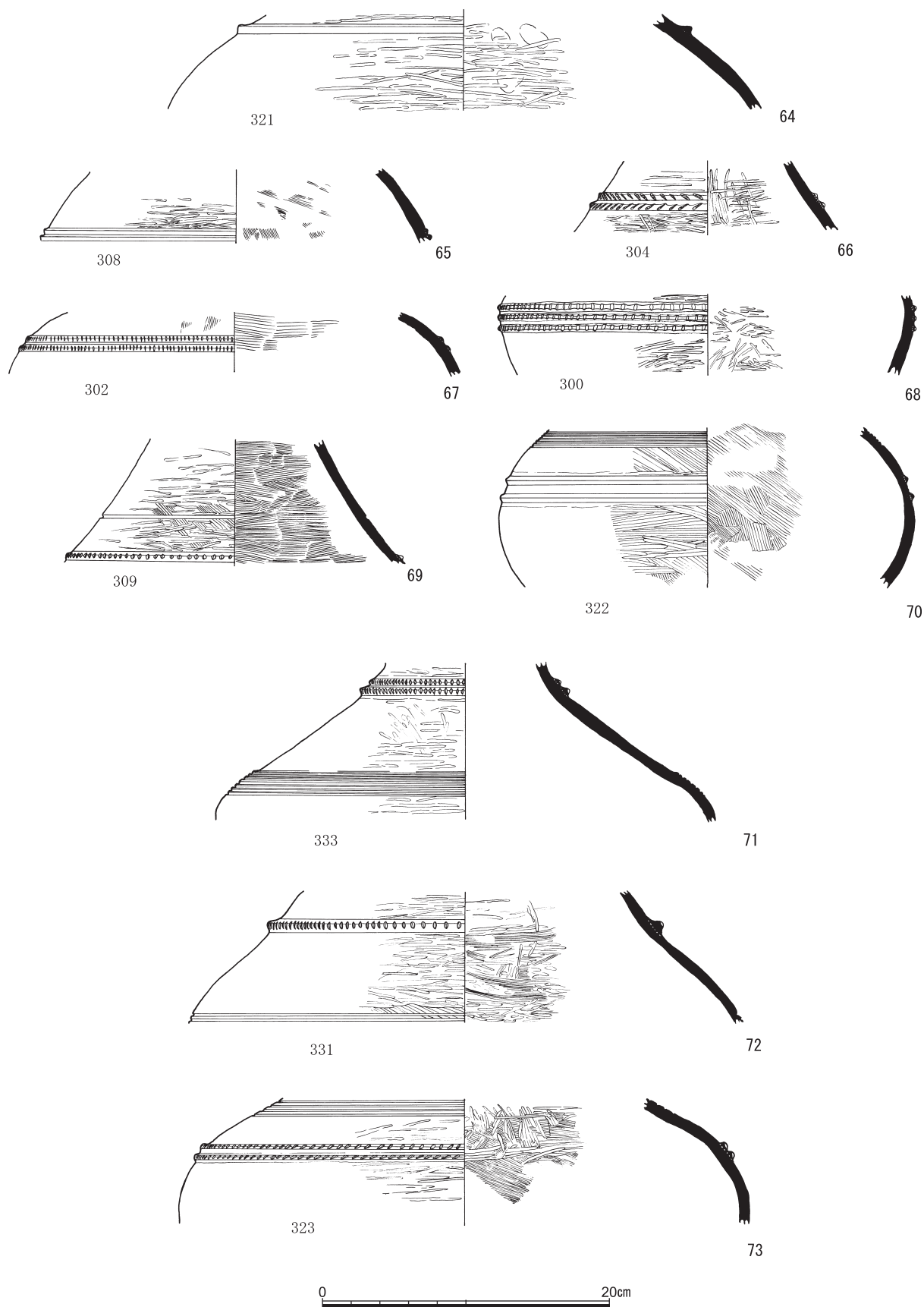


図7 弥生時代前期の土器(5) (64~73: 壺形土器胴部その3) 縮尺1/4

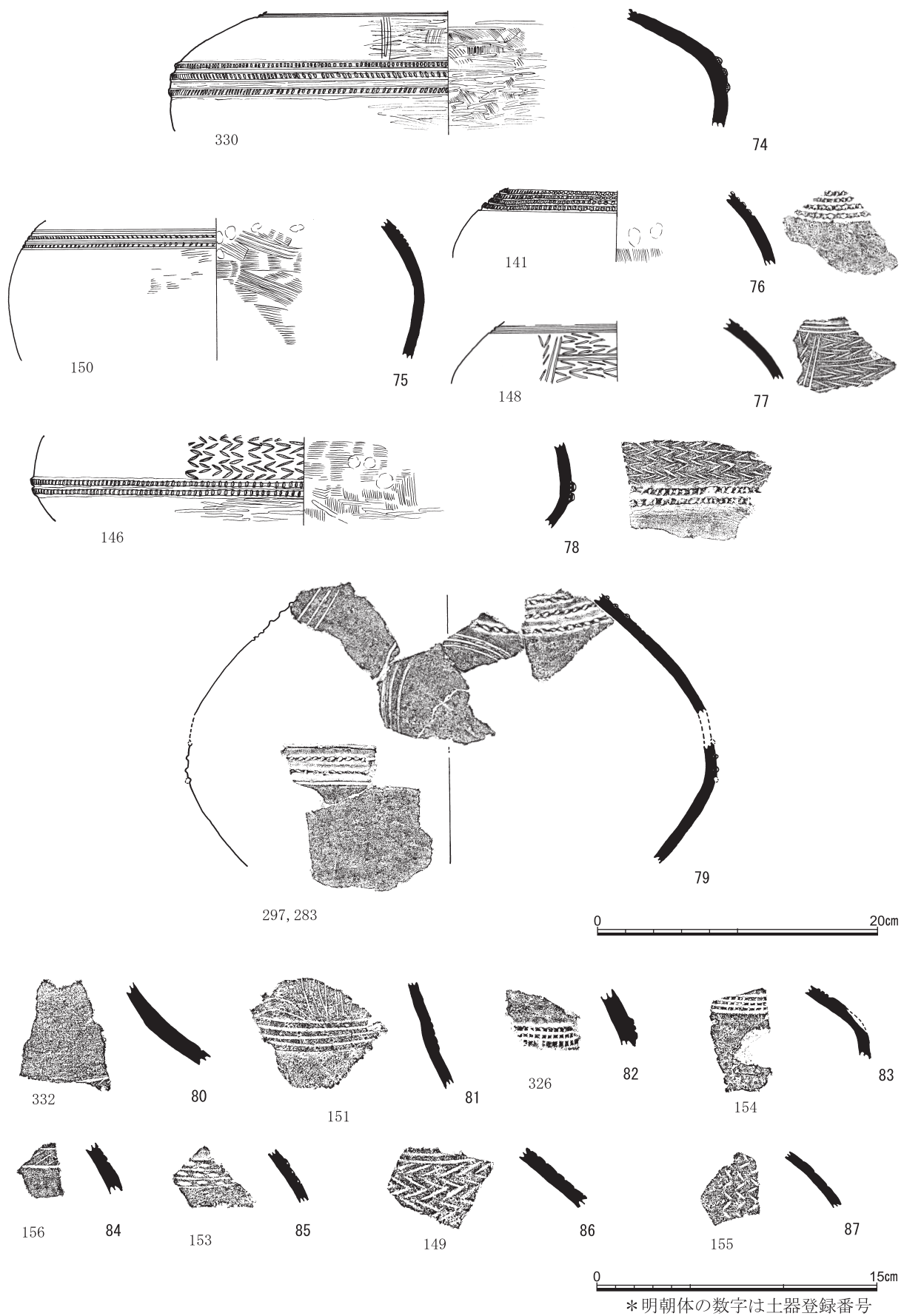


図8 弥生時代前期の土器(6) (74～87：壺形土器胴部その4) 80～87縮尺1/3, その他1/4



図9 弥生時代前期の土器(7) (88~106: 甕形土器その1) 縮尺1/4

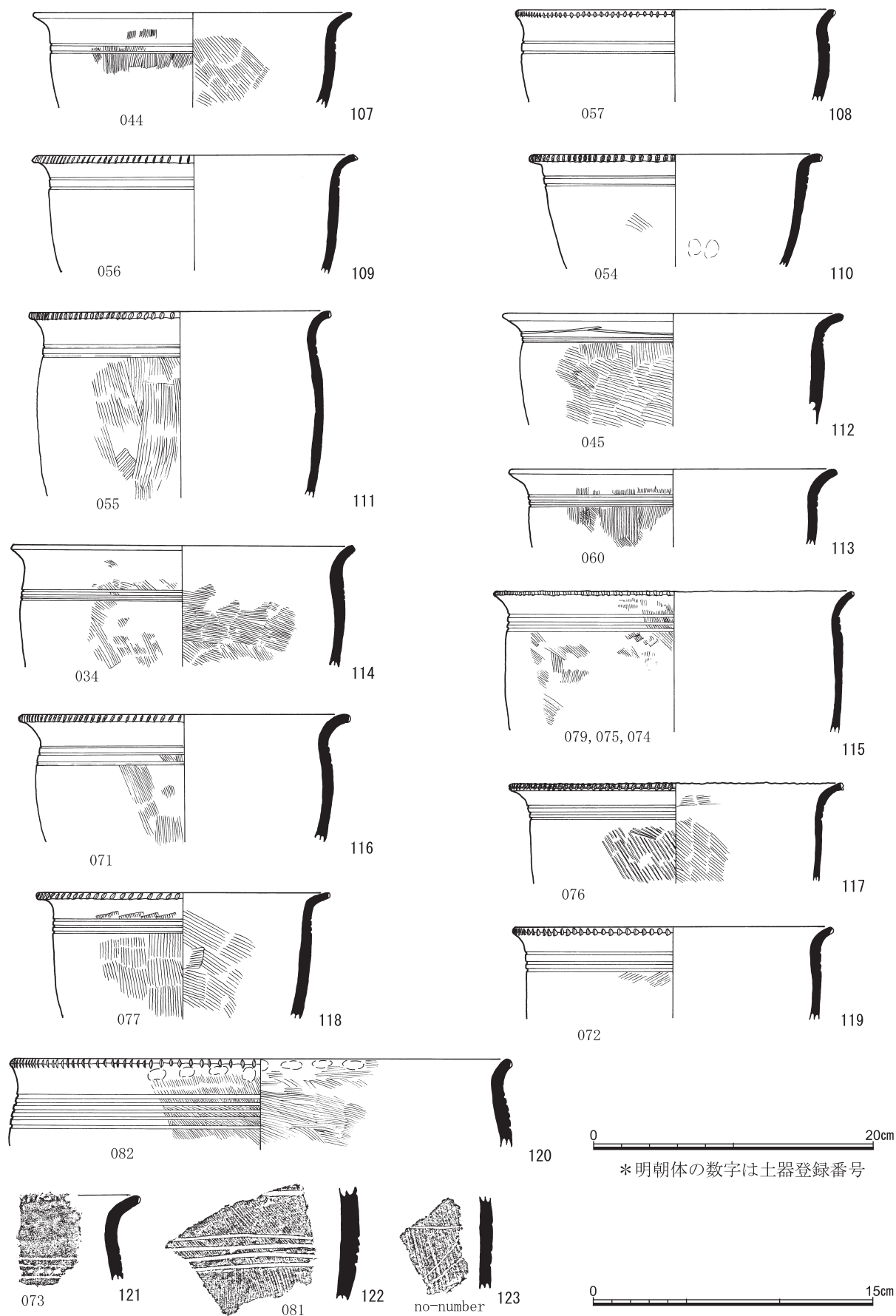


図10 弥生時代前期の土器(8) (107~123: 甕形土器その2) 121~123: 縮尺1/3, その他1/4

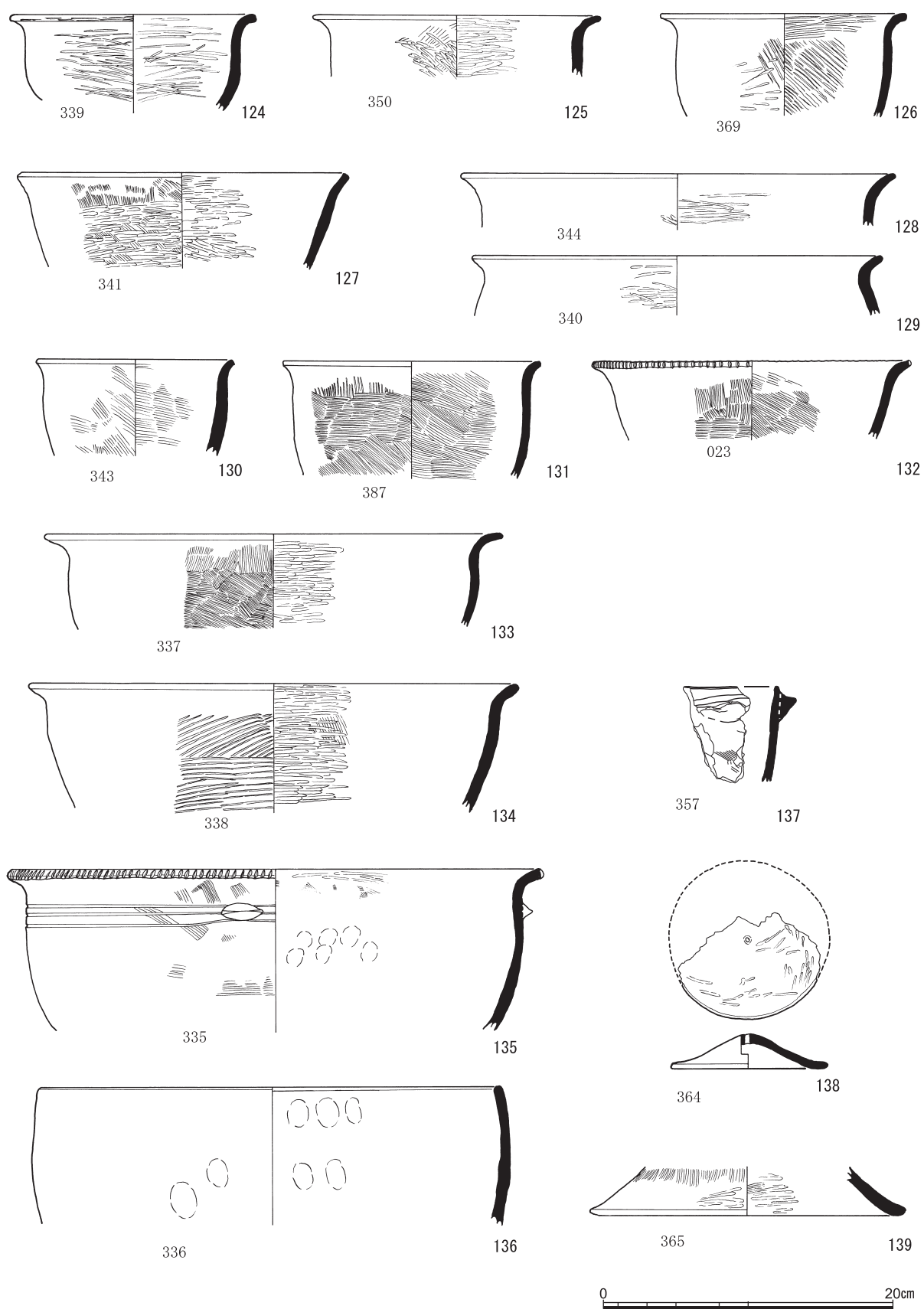


図11 弥生時代前期の土器(9) (124～137鉢形土器, 138・139蓋形土器) 縮尺1/4

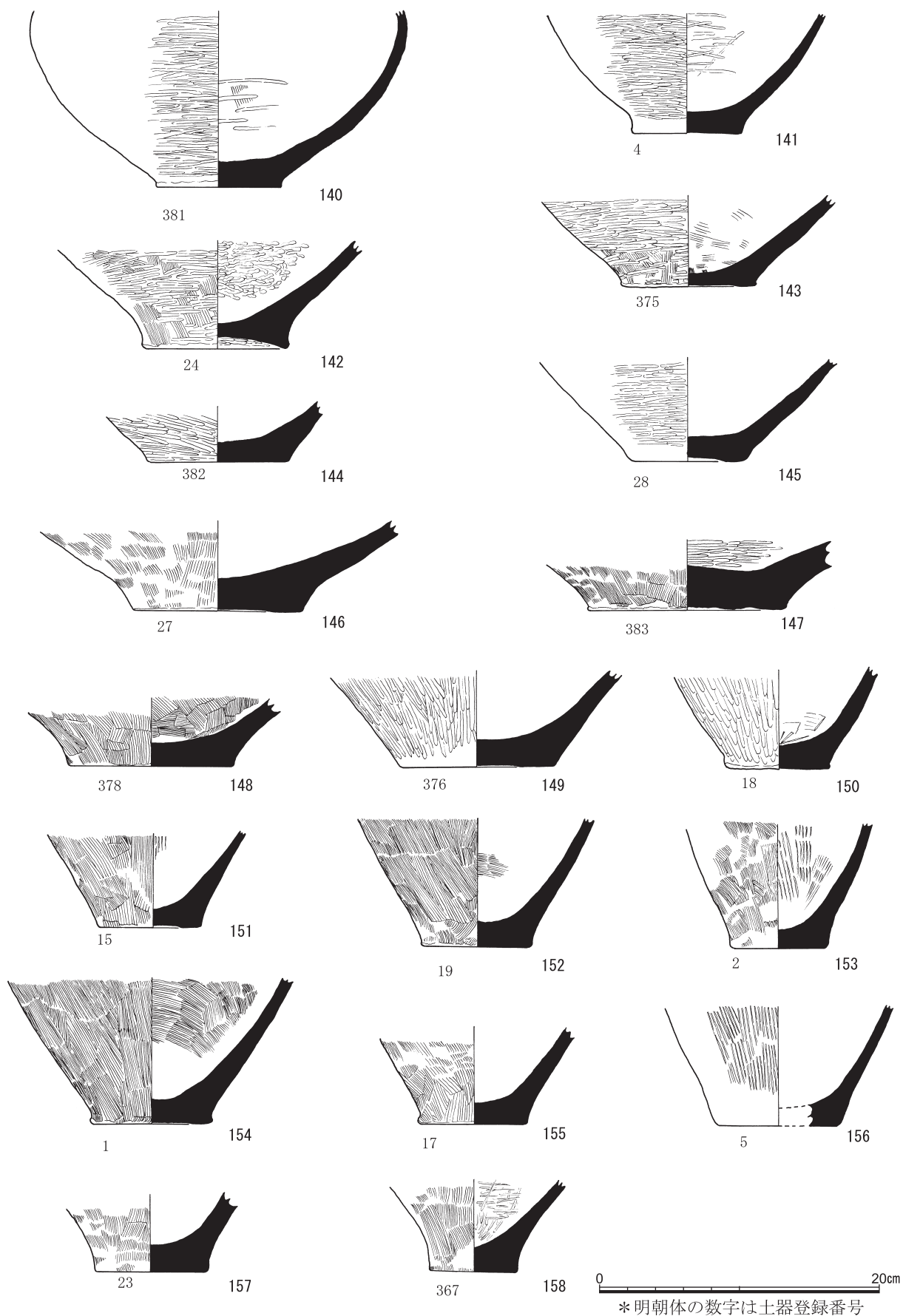


図12 弥生時代前期の土器(0) (140～158底部) 縮尺1/4

(80) および (84) は、横走する篋描沈線と左下がり斜位の繊細な沈線が組み合うモチーフ。
(80) では判然としませんが、(84) の場合、上下を画す 2 条の沈線文間を埋めるように斜線が施されている。(81) は、3 条の篋描沈線をほどこす削出突帯の上側に、細い篋先により横位や縦位の弧線や直線を組み合わせて描いている。縦軸木葉文のモチーフとなる可能性が高いと考える。(82) と (83) は、2 条の篋描沈線文をもつ削出突帯上を、縦位線で区切るかのように長い刻みを施すもの。見た目には、非常に細かな刻目突帯が複数めぐっているかのようである。
(85) は、削出突帯風の段差と 3 条の篋描沈線文で画する胴部上半で、沈線文間には、棒状工具の先端によるとみられる横長の楕円形刺突列がめぐっている。

甕形土器 (88～123) 器形の全容が判明する個体はないが、基本的に内外面とも刷毛および撫でで調整し、一定の深さのうかがえる器形を便宜的に甕形土器として報告する。口縁部の残存率が決して高くはないため正確さには欠けるが、復元される直径からみて、以下のおおよそ 4 つの法量ランク、①18～20cm の小型、②22～24cm の中型、③26～28cm の大型、④36cm 程度の特大型、が存在していたことがうかがわれる。多くの個体は②の中型に帰属するもので、それ以外では、①小型が (94) ～ (96) ・ (104) ・ (105) の 5 点、③大型が (93) ・ (100) の 2 点、④特大型は (120) の 1 点のみにとどまる。

口縁端部の装飾については、無文のままと篋刻みによるものの点数がほぼ等量あり、例外として沈線のみを施すもの (99) が 1 点みられる。また (117) は沈線施文後に篋刻みを加えている。頸部の沈線については、0～3 条までが大半を占め、4 条以上のものはごく少量にとどまる。(100) は刷毛調整の工具端で押さえつけて胴部側を低め段差を造り出している特異例である。(121) は、沈線間に棒状工具先端の円形刺突列を充填するものだが、小片で摩滅気味である。(122) は厚手の器壁をもつ胴部片で、刷毛調整後に篋描沈線文帯が最低 2 段はめぐっている。(123) は薄手の器壁で、繊細な沈線で刷毛調整を地として横線と斜線が確認される破片。これら 2 点は、甕形土器ではなかった可能性もある。

鉢形土器 (124～137) 器表面の内面や外面あるいはそれら双方に篋磨き調整を加えているものを中心に鉢形土器として報告する。それ以外に、小型で器壁の厚いものや、甕とするにはやや特異な器形のものをここに含めておく。基本的に口唇部は丸く収めるか、軽く面取り気味に仕上げ、装飾を施さない。(132) と (135) には甕と同様な篋刻みがあるけれども、復元される器形をみる限り、頸部のくびれは弱く、口径に比して器高の低い器形となるようなので、鉢の範疇とした。(135) には篋描沈線文 3 条にくわえて、推定 2 方向に瘤状の突起が貼り付けられている。(137) も把手状の突起が付される口縁部片。小片であるため全容は不明だが、湾曲の度合いをみる限り口径はさして大きくならないものとみられる。(136) は弱く内彎気味にたちあがる口縁部。頸部のくびれや口縁部の外反は全くない特異な形状である。内外とも撫で調整で、指頭によるゆるやかな凹凸がわずかに確認できるのみ。あるいは全く時期の異なる船岡式製塩土器かとも考えたが、器表面に粘土紐の継ぎ目などは全く確認されず、胎土や色調は他の弥生前期土器と遜色ないため、ここに加える。

蓋形土器 (138・139) 笠形を呈する大小の 2 点を確認した。いずれも壺用と思われる。
(138) は二分の一程度残存し、内外全面に篋磨きを施し、頂部に鈕孔がある。(139) は小片だが、口縁部付近の内外は丁寧に磨いており、径と傾きから蓋形土器と判断した。なお後述する

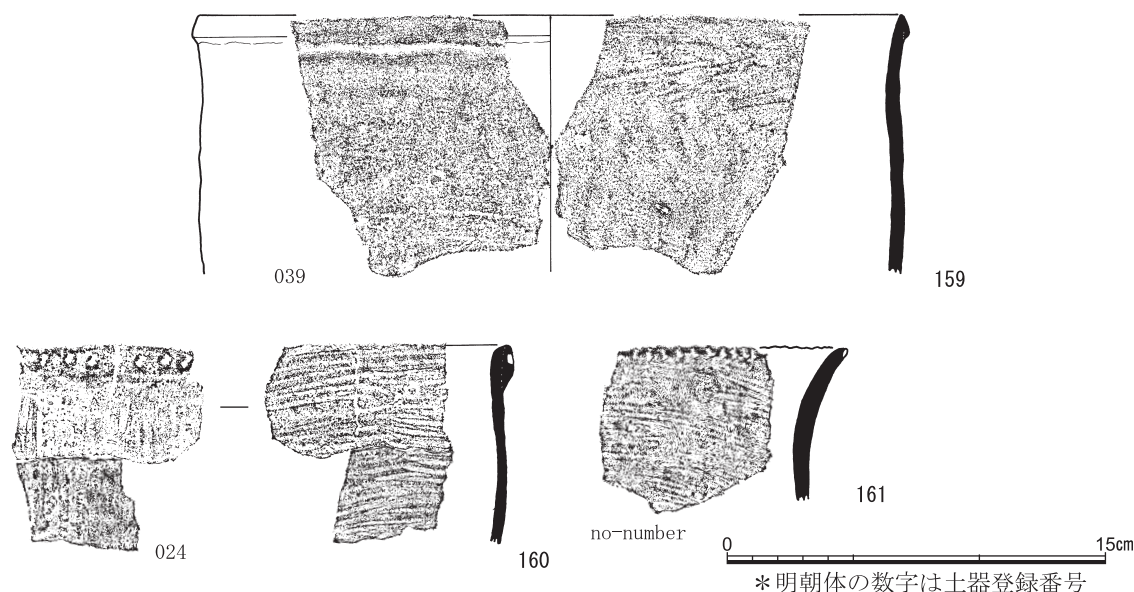


図13 突帯文・条痕文系土器 159～161：縮尺1/3

ように底部（158）も甕用蓋形土器の可能性があるとみている。

底部（140～158） 底部と認定できるものは90点ある。うち19点を報告している。外面を顕著に篋磨きしている（140）～（145）、および、底部からのたちあがりの角度や器壁の厚さからみて胴部の貼る形状がうかがわれる（146）～（148）は、壺であろう。（149）・（150）は、外面を篋磨きで仕上げているが、縦位方向である点やたちあがりの角度から、壺甕いずれとも明確に決めがたい。（151）以下は甕であろうが、（158）は底径が小さく、甕用の蓋形土器であった可能性もある。ただし、それを裏付ける煤などの付着は確認できない。

なお、以上の底面には、粃殻の圧痕が明瞭に確認できる例が多数ある（図版11参照）。また、壺の底部のうち（142）は、おおきく凹み、底面も丁寧に磨いて仕上げている点が特徴的である。ほか、（147）のように外縁が輪台状に凸帯を成している例が複数認められる。底部の成形にあたって、円盤の外周に粘土帯を巻き付けるようにした痕跡とみられるが、明瞭な擬口縁状の粘土帯剥離痕はそれよりも上部、胴部下半にむけての屈曲点付近に観察される。製作にあたっての大休止点のひとつはここに想定されるので、底部円盤とその外周粘土帯とは、時間をおかずに速やかに連続成形されたのであろう。

突帯文あるいは条痕文系とみられる土器（図13-159～161） いずれも遠賀川式土器の範疇には含められない特徴を示しており、突帯文・条痕文系の土器として便宜的にまとめる。粘土紐接合痕の内傾・外傾については不明瞭でいずれとも判別しかねるため、ここでは記述を控える。系譜などの問題については、次節であらためて考察し言及する。

（159）は突帯文深鉢の口縁部とみられる破片。直線的な器形で、口縁端部のみわずかに外反気味となる。口唇部に低平で鋭さのない断面三角形の突帯がめぐっており、外面の突帯上やそれに対応する内面にはっきりと横撫で調整を認めることができる。しかし、明瞭に粘土紐貼付の痕跡を認めることはできないため、あるいは口縁端部を折り返して突帯を成形しているのかもしれない。口縁部以外の調整手法をみると、外面には水平方向の微細な削痕が全面にあり、砂粒の動きも見られるため、板状工具による軽い削りを行っていることがわかる。内面は指頭の凹凸が多数認められるとともに、外面とは異なる斜方向の微細な線条痕があり、砂粒の動き

はない。なお内面には、長さ5mmの朶あるいはその他の穀物粒の圧痕らしきものが1カ所認められる（図版12）。砂粒の細かい比較的精良な胎土で、焼成もこの種の土器としては堅緻であり、明褐灰色（7.5YR7/2）を呈する。使用にともなう煤付着などは一切認められない。本例は、突帯の貼付手法にいささか不明な点があるものの、長原式など、近畿地方における突帯文土器の最末型式の範疇でとらえて差し支えない特徴をもつと評価できよう。

（160）は、特異な帯状の突帯を口縁端部に貼り付ける破片。突帯の上面には棒状工具先端による隅丸方形の深い刺突列がめぐる。外面には縦位の、内面には横位の、貝殻腹縁を原体とする幅広の条痕が全面にわたる。器壁は薄く、内外面とも煤の付着が著しいため、土器本来の色調はうかがいがたい。本例は、装飾や調整手法が縄文晩期末～弥生前期の土器としてはいささか特異であるが、遺存状態は良好であり、他の時期の混入品の可能性は薄いと判断する。仮にそうだとすれば、当該時期の未知の類型、ということになる。

（161）は、ゆるやかに外反する口縁部。口唇部は丸く収められ、端部に貝殻腹縁による刻みが施される。外面には、櫛状工具によるものとみられる横位を基調とした細い線條痕が全面に認められるが、内面は撫でて平滑に仕上げられている。外面のみに煤の付着を認める。内面でみる限り色調は暗赤色（7.5R3/6）。条痕調整の深鉢ということでは、若狭以東の地域に系譜を求められるのであろうが、現状でこれと同一の特徴を持つものは見いだせていない。

被熱変形土器（図版12-162・163） 著しく歪んだり、変色や発泡の認められる土器破片で、一般に被熱変形土器などと呼称されている資料に類似するものが少量出土しており、ここに特徴顕著な2例を呈示しておく。（162）は灰色を呈する壺の頸部から胴部にかけての破片で、巻き込むように変形している。（163）は暗灰色～茶褐色を呈して発泡の著しい破片で軽石状の質感を呈している。これらの詳細と評価は、次節であらためて言及する。

2.2 木 器（図14、図版13）

高杯と斧柄の2点が出土している。

（164）は、一木作りの高杯下半部。脚裾はおおよそ1/2が残存し、残存高は11.2cm、裾端部の復元直径は32.4cmをはかる。材はケヤキで、漆が塗布され黒色を呈する。外面には土器と同様な、削出突帯の上面に2条の沈線を付加した装飾が造り出されており、弥生前期中段階の特徴を明瞭に示す。内面も丁寧に磨かれているけれども、わずかに凹凸が残る。肉眼でみる限り赤彩は確認されない。近畿地方の弥生前期遺跡を中心に、黒漆塗りで、なかには赤彩文も加えて飾る同種の器形の木製高杯は複数知られている。大阪府茨木市東奈良遺跡環濠出土の高杯脚部〔奈良国立文化財研究所1993 PL.130-No.13005〕は、本例と類似する削出突帯風の装飾を施しており、注意される。

（165）は直柄縦斧の斧柄で、頭部と、それに接する握り上端のふくらみ部分が遺存したもの。握りの基部はすべて欠失している。平面観は舟形を呈するようにふくらんでいるが、握りへの移行部にわずかな面が残されている部分が確認されるので、握りから頭部にかけてのふくらみの形状は、なめらかなものでなかった可能性がある。側面観でみると、下端の両側に段状の鋭いくびれをもち、頭部先端に向けてはばち形に開くような逆T字状を呈している。段状のくびれは2面すなわち頭部の上面と下面のみにあり、そこに最大径5.2cm程度の石斧装着孔を穿つ。

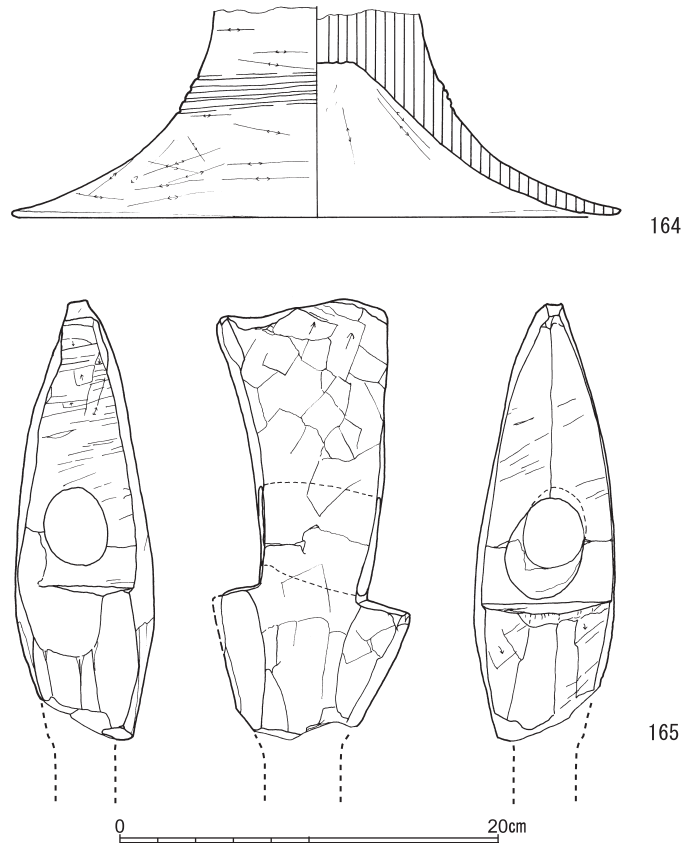


図14 木製品（164高杯の脚部，165直柄縦斧の斧柄頭部） 縮尺1/4

残存長は23.4cm，頭頂部側面幅9.0cm，平面最大幅7.4cmをはかり，材はカシ。直柄縦斧の分類ではⅡ式に相当し，太型蛤刃石斧を装着する伐採斧として近畿地方の弥生前期遺跡で製品や未製品の多数の出土が知られている〔前掲書解説，pp.19-22〕。

以上，木製品は2例のみであるが，いずれも弥生前期としての特徴のきわめて濃厚な優品が出土しているものと評価されよう。

3 考 察

3.1出土土器の編年的・系統的な問題

遠賀川式土器について 今回の出土品中には，段状と呼べるような装飾は甕の1点（図9-100）のみであり，壺の場合は頸部及び胴部の削出突帯に1～5条程度までの沈線を付加，甕の場合は頸部に1～3条程度の沈線，という装飾が主体となっている（表1参照）。これに，1～3帯程度の貼付突帯で飾る壺が少量加わり，器形では，壺の口縁部は短く外反というよりはやや発達して大きく開く傾向が認められる。よって編年的には，おおむね中段階を主体としながら，少量の新段階と呼び得るものをまじえた構成とみなしたい。

文様のなかで特徴的なものとして，篋描や貝殻腹縁の刺突による横位や縦位の無軸羽状文がある。これらは「綾羅木系文様」「綾羅木系土器」などと呼称され，豊前～長門地域の弥生前期・中期初頭の土器に影響をうけた土器群として，ひろく山陰地方一帯に分布が知られる〔田畑直彦2003〕。丸山河床遺跡の発見以前，これらは丹後地域までの出土が知られていたが，今回少ないながらも一定量の存在が明らかになったことで，分布が遠賀川式土器の様式としてのひろがり一致して若狭湾岸を東限とすることがはっきりした。日本海側での遠賀川式土器の分

布は、単独出土では福井県福井市糞置遺跡や石川県小松市八日市地方遺跡などさらに東方にも確認されるが、そうしたなかに綾羅木系土器の出土は知られていない。綾羅木系土器は、日本海側の遠賀川式土器様式圏内における隣接地域間での日常的情報交流の産物であって、遠隔地への飛び地的な伝播とは無縁であることを示唆していよう。

日本海側の日常的な地域間交流を示唆する点では、甕に口縁端部を刻まないものが目立つという特徴も挙げられる。近畿内陸部の甕の場合は刻むことが普通であり、たとえば北白川追分町遺跡（京都大学北部構内B A30区）では、甕口縁38点中無刻は4点のみである〔伊藤淳史1999〕。対して丸山河床遺跡では、判別できた限りで有刻43点、無刻55点で、後者が上回る結果となっている。この傾向は、隣接する丹後地域でさらに顕著となっており、与謝野町の温江遺跡では口縁無刻の甕が3／4を占めると報告される〔岩松保・肥後弘幸2010〕。山陰地域においても、同様な傾向は指摘されており、前期中段階における無刻突帯文土器との関連で口縁無刻甕が出現すると指摘がされている〔土器持寄会論文集刊行会2000 pp.115-135〕。若狭地域では目下こうした突帯文土器との関係は不明であるが、いずれにせよ丸山河床遺跡の遠賀川式土器が細部に至るまで近畿以西の日本海側の技術を基調としていることは明らかであり、若狭湾岸に定着した弥生文化の系譜を如実に示すものであろう。その伝わり方は、丹後地域との類似度の強さから見て、山陰地域から一気に飛び石的に伝播したものというよりも、隣接地域間の交流の連鎖を通じて、面的に拡大していくように定着したものとみたい。

突帯文・条痕文系関連の土器について 3点のみであるが、遠賀川式土器とは明らかに異なりながら遺存の良い土器が出土した（図13）。それらの系譜については、不明な部分が多く推測を重ねることになるが、今後の検証課題として記しておくことにする。なお、近年調査された府中石田遺跡や若狭町曾根田遺跡〔福井県埋文セ2009〕からは、縄文晩期～弥生前期に帰属する資料も出土しているとされ、今回報告の3点と関連づけられるものが含まれている可能性が高い。今後それらの整理・報告が進めば、若狭におけるこうした系譜不明の土器群の実態も、解決されていくだろう。以下、個別に記述する。

（159）は、既述したように縄文晩期末突帯文土器の系譜に連なる最末期型式の可能性が高いと評価する。遠賀川式土器定着後の前期中段階に併存していた突帯文土器の存在を想定することになる。山陰の因幡・伯耆地域では、無刻の突帯文土器が中段階まで併存したと想定されており〔濱田竜彦2000〕、口縁無刻の遠賀川式甕の由来をそこに求める見解があることは前述した。本例もかなり退化としたと言える無刻の突帯文であり、また若狭でも口縁無刻の甕が卓越することは、因幡・伯耆と同様な状況を想起させる。現状では、若狭～丹後地域の突帯文土器資料はきわめて貧弱であり、移行の様相をうかがうことは困難であるけれども、遠賀川式土器の伝播と定着が安定的になされた背景には、突帯文土器段階からの継続的な地域間交流が存在したものと考えられ、系譜として一定期間併存する状態にあっても不自然ではないだろう。今後のまとまった突帯文土器資料の出現と比較検討が待たれるところである。

（160）は、口縁端部に、刺突列をともなう帯状の突帯をもち、条痕調整（外面縦位、内面横位）を施す特異な資料である。突帯文土器と条痕文土器の双方の特徴を備えていることになるが、突帯文土器としてみた場合、取えて類品を探索すると、京都府から兵庫県内陸の丹波地域を中心に、縁带状に肥厚する突帯の形状やその面への刺突、といった一群が散見されている。

たとえば、亀岡市太田遺跡〔京都府埋文セ1986 第42図－34・第73図－200〕、丹波市青垣町応相寺遺跡〔氷上郡教育委員会2000 第6図－1～3〕、丹波市市場遺跡〔兵庫県教育委員会2002 図版35－52〕、などである。ただしこれらは、あくまで突帯文の類似だけで貝殻条痕調整ではない。一方で、口縁の端面やその周辺に刺突列を施す、という特徴のみに着目するならば、越前地域などでも条痕文系や沈線文系と呼ばれる土器群の一部に見られるものの、基本は指頭押捺などで、棒状具の刺突は例外的存在であり、定型化した技法とはいえない。このように、周辺地域の同時期に全く同種の類例を見いだせない現状では、若狭地域に特徴的な未知の系譜の土器、とする評価にとどめざるを得ない。なお、時期が下る事例ではあるが、福井市荒木遺跡出土の弥生中期前葉の粗い刷毛調整甕には、口縁端面および縁辺部に棒状具の刺突列を施すものがあり、突帯こそ無いものの技法的に本例にきわめて類似した装飾として注意される〔福井県1987 図版200－10の土器〕。中期前葉に認められるこうした装飾の由来を、本例のような土器に仮説的に系譜を求めることも一案として、今後若狭～越前地域において間を埋めるような資料群の探索と検討を続けていくことにしたい。

(161)は、外面全面を斜位の細かな条痕調整する深鉢で、内面は撫で仕上げ。外反傾向の口縁部で、唇部は貝殻の腹縁で刻むものである。条痕調整の雰囲気は北陸地方の縄文晩期末～弥生前期の所産としても良さそうであるが、たとえば当該期に越前地域で設定される糞置式の主体となる深鉢は、器形は直立～内傾指向であり、口縁付近の条痕は撫で消すことを基本としているため〔豆谷和之1994〕、特徴が異なるといえる。条痕の雰囲気は異なるが、器形や装飾は東海地方に系譜を求める方が妥当ではないかとも考えるものの、確証を得ない。

3.2被熱変形土器について

丸山河床遺跡出土の弥生前期土器の中には、二次的な被熱によると考えられる器面の発泡や変形が認められる土器が存在する（図版12－162・163）。

(162)は壺形土器の胴部と思われる。調整は内外面ともにナデ。現状では沈線が3条あり頸胴部境であろう。下方が巻き込むように強く歪んでいる。外面は表面がわずかに鬆状に発泡しているが、内面は普通である。(163)は、面をもたず丸みを帯びた口縁端部が認められる。径の大きい鉢であろうか。鬆状の発泡が内外面で全体的に見られるが、内面の方がより顕著である。発泡は口縁端部にも見られるが破断面には及んでいない。発泡により調整はわかりにくい。内外面ともナデであろうか。

この2点以外にもわずかな発泡が見られる破片が11点抽出できている。また表面に発泡はないが、発泡をもつ破片の一部と同様に黒色を呈し、二次焼成を受けたと思われる破片は60点ほどある。器種が判別できるものでは壺形土器が多く、逆に確実に甕形土器と言えるものはない。文様部分から数個体分あると判断できる。この中で発泡が内外両面見られるのは(163)のみである。

二次的に熱を受けて器面の発泡や変形が認められる弥生土器はこれまでも散見されている。当該期における高い温度が生じる要因としては、青銅器の鑄造等の金属製品の加工作業との関係が第一に想起される。そのためこれら被熱変形土器については、出土した遺跡における金属器生産の存在を示すか否かについての議論が主に行われてきた。

こうした検討の中で代表的かつ詳細な検討として、大阪府八尾市美園遺跡出土資料を用いて沢田正昭らによって行われたものが挙げられる〔沢田正昭ほか1985〕。沢田らは、まずこれら変形土器の詳細な観察から変形が第一次焼成によるものではなく、二次的な焼成によって生じたものであることを示している。次に自然科学的な分析の結果、発泡の見られる土器は1200℃前後の熱を受けていると推定されること、金属成分が認められなかったことから、金属器生産に直接関係するとは言い難いことを示している。その結論としては、金属製品の生産に関係した可能性を残しつつも、火災などの偶発的な事故によるものとするのが妥当であるとまとめられている。

また、秋山浩三は実物の土器片を使用して高熱下での変化を観察する実験を行っている〔秋山浩三2007〕。その結果、沢田らの自然科学的な分析による推定の妥当性を確認し、沢田らが想定した以上の短時間で発泡状態に変化することを明らかにしている。その一方で、溶解金属と接触させても痕跡が残りにくくなることを明らかにし、変形土器類と金属鑄造生産との関係を完全に否定することもできないとしている。また、こうした被熱変形の類例が弥生前・中期に集中することから、その要因はあくまで人為的なものに求めたいとしている。

ちなみに北陸南西部における青銅器の鑄造関係資料は、福井県では中期の土器とともに出土した坂井市下屋敷遺跡出土の石製の銅鐸鑄型が存在する〔福井県埋文セ1988b〕。その他は資料が多い石川県を含めても全て後期以降に帰属するものである。本資料が属する弥生前期との間には大きな間隙があるため、金属器生産との関係で評価するのは現状では困難であろう。

一方近隣では、京都府京丹後市竹野遺跡において同じく弥生前期の被熱変形土器が出土している〔田代弘2003 第37図-4〕。1点のみの出土であるが、本遺跡資料の大部分と同様に壺形土器である。また、管見では北陸地方の遺跡において弥生時代を通じて同種の土器は今のところ出土していない。

以上のように、弥生前期の被熱変形土器について、青銅器鑄造等の金属器生産と積極的に関係づけるには、現状では否定的な材料が多い。今後も同種資料をあらためて集成して詳細な観察・分析をおこなうとともに、空間的な分布、帰属時期や種類の傾向（弥生前期後半の壺形土器に偏在するのか否か、など）についても検討することが、求められよう。（杉山拓巳）

3. 3若狭および近畿北部地域における縄文晩期末～弥生前期遺跡の動態

ここではひろく近畿地方の北部、具体的には日本海に面した地域と、日本海に注ぐ水系にかかわる一帯（敦賀平野から丹後・但馬・由良川水系の兵庫丹波にかけて）の遺跡情報を集成・検討し、その動態のなかで丸山河床遺跡の意味を考える手がかりとしておきたい。

各遺跡の情報については巻末の遺跡一覧（表3）に、位置は（図15～17）に示した。本文中で言及する個別遺跡の報告文献についても表3を参照されたい。対象としたのは、縄文晩期末～弥生前期の時間幅で位置づけられる突帯文土器（滋賀里Ⅳ～長原式）および遠賀川式の各段階の資料を出土したとされる76遺跡である。ただし、まとまった資料が得られている遺跡は、ほぼ遠賀川式の一部の段階に限られている。なお突帯文土器のうち長原式には、他地域産や後続する段階のものである可能性を有した、既存の型式の範疇からはいささか外れるような特徴の個体も含めている。表3では、遺構や包含層の確認されている場合や、遺存度の良い資料の

多数出土といった、确实度の高い遺跡存在を濃く、それ以外の状況の場合を薄いトーンで各段階毎に表記し、信頼度を区別した。また図15～17では、突帯文土器のみが出土している遺跡は記号△、遠賀川式土器のみ出土の遺跡は○、双方出土の遺跡は●、文献などに記載はあるものの具体的な内容や状況が不詳な遺跡を□、として位置を表示した。以後の本文中の（）内数字は表3中の遺跡番号に対応し、図15～17とも共通する。

（1）地域別の状況

最初に地域別に状況を概観しておく。

若狭（敦賀平野を含む） 若狭地域では、今回紹介した丸山河床遺跡（1）の発見以前より、小浜湾岸に散在する古代の製塩遺跡から遠賀川式土器の出土は知られてきた。いずれも甕形土器片のごく少量の出土であり、そこでは突帯文土器の出土は知られていない。より東方、若狭町（旧三方町域）鱒川河口の古三方湖低地帯の縄文遺跡群においては、これとは逆のパターンで、鳥浜貝塚（8）やユリ遺跡（9）など突帯文土器片の微量出土があるなかで、遠賀川式土器の出土は全く知られていない。ただし、鱒川流域平野自体では、田名遺跡村山地区（11）で確実な遠賀川式土器の出土がある。現状は甕2点にとどまるが、壺・甕のセット関係をもった基本的分布圏がこの平野には及んでいる可能性を示唆しよう。

なお、丸山河床遺跡よりも北川を上流にさかのぼった若狭町旧上中町域においては、かつて十善の森古墳（14）の封土内から突帯文土器片が採集されており〔斎藤優1970 p.25〕、近年では北川へ合流する支流の鳥羽川上流にある曾根田遺跡（3）において、下層の流路堆積から縄文晩期の突帯文土器などが出土したと速報されている〔福井県埋文セ2009〕。遠賀川式土器がともなっているかどうかについては不明で、詳細は今後の整理と報告を待たねばならないが、上記したように旧三方町域まで分布圏が想定できるとすれば、そのルート上にある曾根田遺跡で西日本系の突帯文土器や遠賀川式土器が存在しても、不自然ではないであろう。また仮に曾根田遺跡で遠賀川式土器がほとんど出土しなかったとすれば、北川水系の上流域には突帯文土器、下流の河口近くに遠賀川式土器という分布の偏在傾向がうかがえるようになり、海浜部より進行した若狭における弥生文化の導入・定着の様相を反映するものといえよう。

敦賀平野については、報告された遺物としては櫛川鉢谷遺跡（13）の刻目突帯文土器片1点のほかに、坂の下遺跡（16）で遠賀川式土器の甕口縁部1点が出土しているが、ともに流入で、遺跡の実態は不明である。このように、前期の様相を論じる材料を全く欠くが、中期前葉以降に隆盛する吉河遺跡出土の土器群が、近畿地方中心部とは明らかに異なる様相を示し、東海～中部高地方面の特徴を色濃く示していることから類推して、敦賀平野の前期段階は遠賀川式の基本的な分布圏から外れていたのではと想像する。すなわち、分布圏の東限は旧若狭国の範囲内にとどまるものであったと推測しておきたい。若狭でも敦賀平野との境界にほど近い美浜町今市遺跡（12）では、遠賀川式土器かとみられる甕のほかに東日本の沈線文系（大地式系）土器が採集されており、後者の土器分布の西限となっている。遠賀川式分布圏と北陸～東日本系土器分布圏の境界付近の状況を示唆するようで、興味深い。

北丹波 京都府北部の由良川水系に属する地域は、旧国では丹後と丹波の一部に属しているが、『京都府弥生土器集成』〔京都府埋文セ1989〕における地域区分に倣い、説明の便宜上まとめて「北丹波」とする。

舞鶴湾口に位置する浦入遺跡（62）は、海拔0 m前後に立地する広大な遺跡である。縄文晩期～弥生前期については、顕著な遺構こそ確認されていないものの、M地点（嶋遺跡）とされる地区を中心に突帯文土器と遠賀川式土器の双方が少量ずつ出土している。とくに後者については、前期中段階を中心とする時期に比定され、綾羅木系の羽状文（ただし貝殻腹縁施文ではないよう）の存在が注意される。由良川水系については、下流域の低地部の自然堤防や河岸段丘上に遺跡が点在している。志高遺跡（64）は遠賀川式土器がまとまって出土し、弥生中期以降に発展していく遺跡であるのに対して、三河宮の下遺跡（65）は微量の突帯文土器が確認されるものの、主体は縄文期で弥生土器は伴わないという、対照的な遺跡と評価できる。中～上流域では大規模な遺跡は見つかっておらず、少量の資料が採集されたにとどまる場合がほとんどであるが、たとえば福知山盆地の馬場池東方遺跡（68）、兵庫丹波の的場遺跡（76）など、突帯文土器と遠賀川式土器の双方が出土している遺跡が多く、注意される。

丹 後 遺跡分布は丹後半島の西半に偏る傾向がみられ、東半では、野田川流域の沖積地が主で、湾岸部では知られていない。蔵ヶ崎遺跡（18）からは、矢板列をとまなう流路遺構とともに豊富な弥生前期の遺物が得られている。その上流に位置する加悦谷の温江遺跡（19）は、台地上に径100mほどの環濠をとまなう集落が想定復元され、前期中段階のまとまった土器群と人面付土器が出土している。これらの遺跡から突帯文土器の出土は知られていない。西半では、日本海沿岸部のほか、竹野川中・上流域の内陸平野部に多数の遺跡が知られるが、やはりほとんどは前期の遺跡である。その出土のありかたは、鳥取橋遺跡（23）、菅沖波遺跡（28）のように、形式的に古相を呈する壺が単独で採集されているだけの場合、竹野（22）、松ヶ崎（32）、函石浜（33）のように、臨海部で遠賀川式土器のみがまとまって出土する場合、扇谷（26）のようにむしろ主体は中期初頭の櫛描文土器であるなかに、新相の遠賀川式土器が混在して出土している場合、などに区別される。なお途中ヶ丘遺跡（29）は、出土資料の全容が不明瞭だが、中期以降の土器とともに前期の資料もまとまっているようで、この地域では珍しい前～中期を通じて継続的な拠点的遺跡となる可能性が高い。突帯文土器の出土については、縄文遺跡として知られる平遺跡（21）のほか、浦明遺跡（34）、沖田遺跡（20）で微量みとめられるにすぎない。

但 馬 日本海沿岸部では、香美町（旧香住町）岡畑遺跡（36）で突帯文・遠賀川式双方の土器片が微量採集されているほかは、様相不明である。ほかは、すべて円山川水系の豊岡盆地以南に限られる。このうち、豊岡盆地、出石盆地など下流域では、ほとんどが弥生前期の遺跡であり、確実な突帯文土器の出土は報告されていない。駄坂川原遺跡（40）は、遺構に伴なうものではないが、川床内堆積土より貝層の確認と遠賀川式土器のまとまった出土があり、綾羅木系の羽状文など日本海沿岸に特徴的な装飾も多数含む。この遺跡は、弥生中期にも継続しており、隣接丘陵上に築かれる駄坂舟隠墳墓群（41）は、出土土器に前期的様相を残す資料を含みつつも基本的に中期前葉の墳墓として評価され、川原遺跡と関連づけられている。一方、それらの北方約2 kmに位置する中谷貝塚（38）は、縄文中・後期の貝塚として著名で、晩期前半までは継続した貝層形成が把握されているものの、晩期後半の状況は不明である。荒木遺跡（43）では、前期最末の土器群と1点の長原式出土との報告があるが、記述のみで実態は不明である。

このような、突帯文土器の存在の希薄な状況は、円山川水系をさらに遡行した日高町、八鹿町域一帯まで認められるが、和田山町、山東町域に至ると異なってくる。多くの遺跡が弥生中期以降が主体の遺跡で、遺構や明瞭な包含層にともなわない少量で散発的な混在出土ではあるけれども、突帯文土器、遠賀川式土器双方が確認されている。筒江片引遺跡（54）は、そのなかでは量的にまとまった資料があり、弥生中期前半までの土器が出土している。なおこの一帯では綾羅木系文様の施文はみられない。また遠賀川式土器は、ほぼ新相を呈するもので、古相と明確に指摘できる資料はない。

（２）遺跡と出土土器の様相からみた近畿北部における弥生化

地域毎の様相を総覧してきたところで、特徴を簡潔にまとめてみよう。出土のありように遺跡間の格差が激しいが、各段階の出土遺跡数を小地域単位で示したので（表２）、表３とあわせて参照されたい。

①総じて突帯文土器の出土がかなり希薄であること

現在までのところ、突帯文土器資料が出土している遺跡についてみると、鳥浜貝塚（８）や三河宮ノ下遺跡（65）、浦入遺跡（62）や平遺跡（21）といった、晩期中葉以前の資料がまとまって出土しているような著名な縄文遺跡が目につく。浦入や平では遠賀川式土器の出土が見られるが、鳥浜貝塚での微量の突帯文土器は、連綿と続いてきた縄文遺跡のまさに終焉段階の資料となっている。これらの遺跡から出土している突帯文土器は、基本的には西日本の突帯文土器であり、遠賀川式ともども、若狭湾岸までがそれらの基本的分布圏であったことを示していると言える。上記以外の出土遺跡は、北・兵庫丹波や但馬南部の和田山盆地など内陸部にやや偏るように思われるが、多くは弥生前期以降の遺跡から少量の出土が確認されているにとどまる。この点の特徴については別に後述しよう。

②遠賀川式土器の多量出土遺跡は日本海沿岸部に卓越していること

突帯文土器の希薄さと対照的に、日本海沿岸部においては遠賀川式土器がまとまって出土する遺跡はきわめて多い。こうした遺跡のほとんどでは、突帯文土器の出土をみていない。一方で、前期以後の資料の継続出土ということに着目してみると、

１：遠賀川式土器のみが出土、すなわち前期に終焉も限られるとみられる遺跡

＜丸山河床（１）、蔵ヶ崎（18）、温江（19）、竹野（22）＞

２：遠賀川式土器も出土しているが、主体は中期前葉の土器で、前期末～中期前葉の遺跡

＜扇谷（26）、駄坂川原（40）＞

３：遠賀川式土器のみならず、中期前葉以降も各時期の資料が出土している遺跡

＜途中ヶ丘（29）、松ヶ崎（32）、志高（64）＞

表２ 地域・時期別確認遺跡数

地域／時期	滋賀里Ⅳ式	船橋・長原式	Ⅰ様式古・中段階	Ⅰ様式新段階
但馬北部（豊岡・出石盆地）	0	2	1	9
但馬南部（和田山盆地）	0	6	4	10
兵庫丹波由良川水系	0	3	0	3
丹 後	2	1	10	6
北 丹 波	2	7	4	5
若狭（敦賀平野含む）	2	4	2	8
時期別計	6	23	21	41

といった3つの類型に細別されてくる。現在のところ、2とした前期末～中期前葉に限られるような特異な類型は、丹後と但馬に顕著であるようだ。しかも、それぞれ扇谷には七尾(27)、駄坂川原には駄坂舟隠(41)といった、近接丘陵上の墓地遺跡がともなっている点が共通する。丹後では扇谷、但馬でも八鹿町の東家の上(47)でこの時期の丘陵上の特異な環濠が確認されることを考慮すると、両地域にまたがった広域での社会変動が推察される。

3としたような、継続発展型とも言い得るような集落遺跡については、但馬地域では目下確認できず、丹後地域でも、大規模と想定できるのは上記のうち途中ヶ丘のみといって良い。若狭地域においても、現状では中期前葉の資料が欠落しており、前期の遺跡はその後に継続する様子がみられない。こうした、ある程度近畿北部全域に指摘できるような中期前葉への非継続な傾向は、2とした類型の遺跡に象徴されるような社会変動と関係するものと思われる。

③：突帯文土器と遠賀川式土器の双方が出土している遺跡は、やや内陸部に偏ること

この状況については、②と裏表の関係になるが、突帯文土器の出土遺跡が少ないなかで、遠賀川式土器が同じ遺跡から出土している事例は、少ないながらも内陸部に偏るといえる。但馬地域では和田山盆地の朝来市(旧和田山町)筒江片引(54)、さらに内陸の兵庫丹波地域では丹波市市島町の的場(76)、上ノ段(75)、京都府下北丹波では綾部市馬場池東方(68)といった諸遺跡である。いずれも少量の出土であり、遺構に伴わない採集品も多い。これらの遺跡の遠賀川式土器については新段階が中心となっており、綾羅木系の文様は認められない。筒江片引での突帯文土器は、口縁端部からかなり下がった位置に添付される特徴から、長原式よりも後続する段階のものと評価できるかもしれない。また、的場・上ノ段では、出土量が少ないながらも、遠賀川式土器については壺がほとんどであり、出土した突帯文土器を煮沸形態に充てる想定が、報告書においては示されている。

以上のように、突帯文土器の分布や遠賀川式土器との共存状況、遠賀川式出土遺跡の特徴などを中心にごく簡潔にまとめてみた。近畿地方北部における弥生化を推し量る指標として、遠賀川式土器様式の定着の度合いを単純に用いるならば、縄文晩期末に人口希薄であった北但馬・丹後・若狭といった日本海沿岸部に、前期中段階のころ西方から新来の集団が到来して拠点を構え、比較的短時日のうちに新たな領域を拓いていった、という図式になろう。そして、綾羅木系文様が分布する状況からみて、海伝いに山陰地方からの系譜を想定することが可能である。しかしながら、和田山盆地や北丹波の内陸部などはこれと同一視できず、しかも、沿岸部よりも一段階遅れる前期新段階ころに開発が活発化する傾向が強いとともに、突帯文土器の残存が指摘されることから、既存の突帯文土器集団の領域において、かなりゆるやかに弥生化が進行していったという図式も想定可能である。

もっとも、大阪平野の低地帯における長原式土器の新相と遠賀川式の古段階の併存期間は100～150年に達するという、近年の炭素14年代測定結果があり、それにもとづく弥生開始期の集団間関係は、少数の新来者と多数の在来民の長期にわたる同化と融合の過程であるという図式が提出されている〔藤尾慎一郎2009〕。こうした見解を今回の対象地域に援用しようとしても、当該地域の突帯文土器に編年の細分が可能なほどの資料の蓄積がなく、遠賀川式の古段階資料もほとんど認められない現状では、きわめて困難である。けれども、この現状が当時の様相を反映していると敢えて仮定するならば、近畿地方北部は、近畿中心部における長い同化・

融合の過程とほとんど無縁のままに経過し、むしろその終焉近くになって本格的な弥生化の波が及んだとの評価になろう。そして、その時点で在来集団はほんのわずかししか居らず、折衷的な土器様相がほとんど認められないことからみても、その後に同化・融合と言うよりは圧倒的多数の遠賀川集団の側へとすみやかに吸収されてしまったかのようなのである。ただし、北部でも内陸部においては遠賀川集団の拡散が遅れ、在来集団が残存し併存が続いた可能性がある。また、若狭においては、丸山河床遺跡で微量ではあるが混在していた土器から、西日本の突帯文土器集団とは異なる系譜の集団との交渉や併存が、あるいは想定できるのかもしれない。

残念ながら、若狭湾岸を含む近畿地方北部においてこれ以上の本格的な議論を展開するには、今後の資料蓄積を待つ部分が大きいと言わざるを得ないけれども、いずれにせよ丸山河床遺跡の資料は、まとまった遠賀川式土器の様式的資料としては日本海側最東端に位置し、若狭湾をのぞむ沖積低地に西方からの新来者集団が本格的な水稻農耕社会を確実に伝えた状況を示す点で、きわめて重要な意義を持つことは間違いない。

<本文引用・参考文献（執筆者五十音順）>

- 秋山浩三 2007 「弥生時代の被熱変形土器類と試考実験」『考古学論究－小笠原好彦先生退任記念論集－』
- 伊藤淳史 1999 「北白川追分町弥生時代遺跡の展開－京都大学北部構内B A30区（追分地蔵地点）の出土資料－」『京都大学構内遺跡調査研究年報1995年度』
- 岩松保・肥後弘幸 2010 「温江遺跡第6次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第139冊
- 小浜市史編纂委員会編 1992 『小浜市史』通史編上巻
京都府埋文セ（（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）
1986 『京都府遺跡調査報告書』第6冊 太田遺跡
1989 『京都府弥生土器集成』
- 斎藤 優 1970 『若狭上中町の古墳』
- 沢田正昭・秋山隆保・井藤暁子
1985 「八尾市美園遺跡出土の変形を受けた土器について」『美園』
- 田代 弘 2003 「竹野遺跡・宮遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第107冊
- 田畑直彦 2003 「山陰地方における綾羅木系土器の展開」
『山口大学考古学論集』（近藤喬一先生退官記念論文集）
- 土器持寄会論文集刊行会 2000 『突帯文と遠賀川』（土器持寄会論文集）
- 奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録近畿原始編』
- 濱田竜彦 2000 「因幡・伯耆地域の突帯文土器と遠賀川式土器」『突帯文と遠賀川』（土器持寄会論文集）
- 氷上郡教育委員会 2000 『氷上郡埋蔵文化財調査概要報告書Ⅲ』
- 兵庫県教育委員会 2002 『的場遺跡・上ノ段遺跡』
- 福井県埋文セ（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）
1988 a 『昭和62年度発掘調査報告会資料』
1988 b 『下屋敷遺跡・堀江十楽遺跡』（福井県埋蔵文化財調査報告第14集）
2006 『第21回福井県発掘調査報告会資料－平成17年度に発掘調査された遺跡－』
2007 『第22回福井県発掘調査報告会資料－平成18年度に発掘調査された遺跡－』
2008 『第23回福井県発掘調査報告会資料－平成19年度に発掘調査された遺跡－』
2009 『第24回福井県発掘調査報告会資料－平成20年度に発掘調査された遺跡－』
- 福井県 1987 『福井県史』資料編13考古
- 藤尾慎一郎 2009 「弥生開始期の集団関係－古河内潟沿岸の場合」
『国立歴史民俗博物館研究報告』第152集
- 豆谷和之 1994 「糞置式土器について」『文化財学論集』

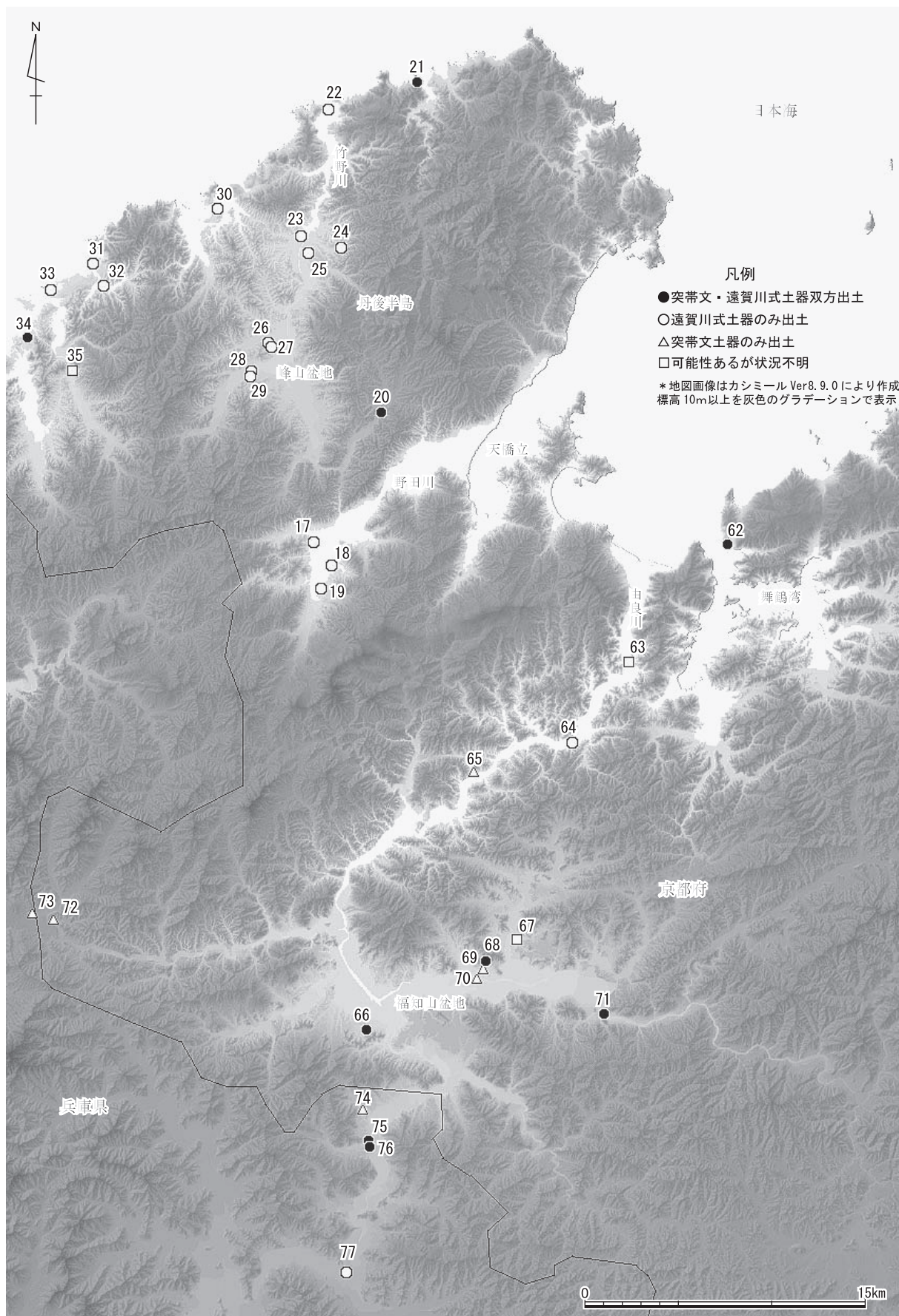


図16 若狭および近畿北部の縄文晩期末～弥生前期遺跡（その2・丹後、北丹波） 縮尺1/30万

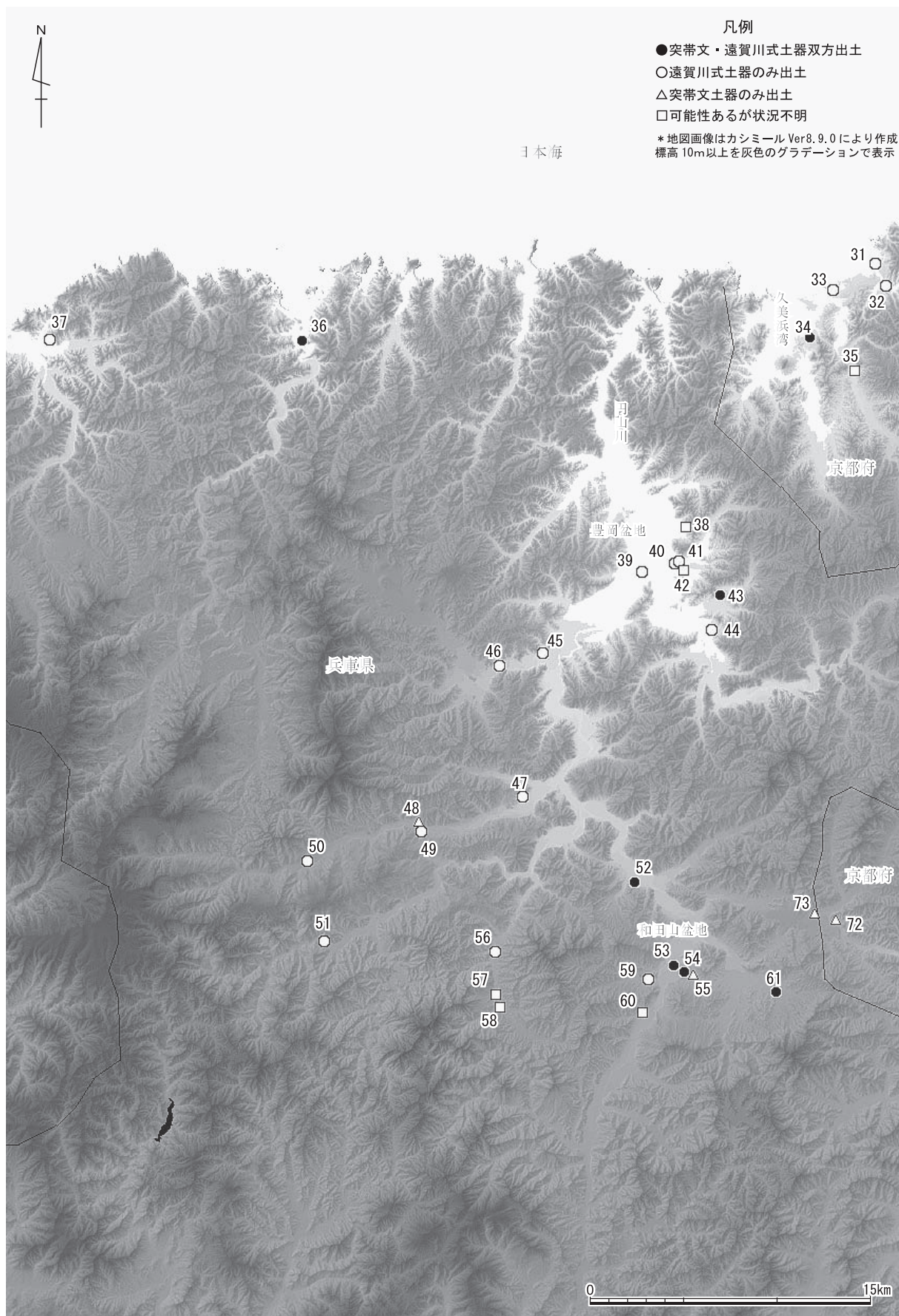


図17 若狭および近畿北部の縄文晩期末～弥生前期遺跡（その3・但馬） 縮尺1/30万

表3 若狭および近畿北部の縄文晩期末～弥生前期遺跡

番号	遺跡名	所在地	立地	北緯	東経	遺構面 標高 (m)	船・I古 滋IV長中	特記	文献
1	丸山河床	小浜市次吉	河床	35295155	135461212	0			1a, 1b
2	府中石田	小浜市府中	沖積低地	35294216	135460026	2			2a-2c
3	曾根田	三方上中郡若狭町(旧遠敷郡上中町)上黒田	谷開口部低地	35304617	135515630	50		流路	3
4	宮留	大飯郡おおい町(旧大飯郡大飯町)大島宮留	砂浜	35315365	135392390	2			4a-4c
5	浜瀬	大飯郡おおい町(旧大飯郡大飯町)大島浜瀬	砂浜	35320306	135393208	2			4a
6	吉見浜	大飯郡おおい町(旧大飯郡大飯町)大島 吉見浜	砂浜	35323545	135393271	4			4a, 6
7	阿納塩浜	小浜市阿納	砂浜	35321010	135470748	1			4a
8	鳥浜貝塚	三方上中郡若狭町(旧三方郡三方町)鳥浜	河床	35331699	135540313	0			8
9	ユリ	三方上中郡若狭町(旧三方郡三方町)鳥浜	湿地	35331756	135335428	2			9
10	江浜	三方上中郡若狭町(旧三方郡三方町)北前川	自然堤防	35325229	135541419	4			10
11	田名村山	三方上中郡若狭町(旧三方郡三方町)田名	自然堤防	35323606	135540007	4			11
12	今市	三方郡美浜町佐田	砂浜	35375387	135585756	10		遠賀川産1大地系辻線文1表探	12
13	櫛川鉢谷	敦賀市櫛川鉢谷	浜堤	35392634	136022252	4		斜面上より流入か	13
14	十善の森	三方上中郡若狭町(旧遠敷郡上中町)天徳寺	丘陵裾	35275170	135504638	35		古墳封土内より刻目突帯文土器	14
15	五十八	三方上中郡若狭町(旧三方郡三方町)海山	湖岸	35353555	135520903	3			15
16	坂の下	敦賀市坂ノ下	段丘	35375294	136044112	13		斜面上より流入か	16
17	下畑	与謝郡与謝野町(旧与謝郡野田川町)三河内 下畑・角外	丘陵	35313012	135054543	10			17
18	蔵ヶ崎	与謝郡与謝野町(旧与謝郡加悦町)明石 蔵ヶ崎	下位段丘	35304744	135062407	7			18
19	温江	与謝郡与謝野町(旧与謝郡加悦町)温江	丘陵裾	35300672	135060148	17		環壕、土坑	19
20	沖田	京丹後市(旧中郡大宮町)森本井内口	丘陵裾	35352071	135081013	98			20a, 20b
21	平	京丹後市(旧竹野郡丹後町)平 湊	海岸段丘	35450679	135092594	20			21a, 21b
22	竹野	京丹後市(旧竹野郡丹後町)竹野 古馬場・中田上ほか	砂丘	35441788	135061744	4			22a-22h
23	鳥取橋	京丹後市(旧竹野郡弥栄町)黒部	河岸段丘	35403301	135051805	33			22b
24	船木家谷	京丹後市(旧竹野郡弥栄町)船木	不明	35401332	135064377	33			24
25	奈具岡	京丹後市(旧竹野郡弥栄町)溝谷 奈具岡	河岸段丘	35400369	135053480	30			25a-25c
26	扇谷	京丹後市(旧中郡峰山町)杉谷 丹波・扇谷 荒山	丘陵	35372362	135040421	60			26a-26c
27	七尾	京丹後市(旧中郡峰山町)荒山 七尾	丘陵	35371565	135041447	51		Ⅱ期初頭方形台状墓2基	27

番号	遺跡名	所在地	立地	北緯	東経	遺構面 標高 滋IV (m)	船・ 長	I 古 中	I 新	特記	文献
28	菅沖波	京丹後市 (旧中郡峰山町) 菅 沖波	河岸段丘	35363378	135033202	31					24, 28
29	途中ヶ丘	京丹後市 (旧中郡峰山町) 長岡 新治	丘陵	35362276	135032961	37					24, 26a, 29a-29c
30	離	京丹後市 (旧竹野郡網野町) 小浜 離山	砂丘?	35412209	135022103	4					30
31	浜詰 やか 浜	京丹後市 (旧竹野郡網野町) 浜詰	砂丘	35394347	13457594	4					24, 31
32	松ヶ崎	京丹後市 (旧竹野郡網野町) 木津 松ヶ崎	砂丘	35390423	134581633	3					32a-32c
33	函石浜	京丹後市 (旧熊野郡久美浜町) 葛野 箱石	砂丘	35385686	134562442	5					22e, 24, 33a-33c
34	浦明	京丹後市 (旧熊野郡久美浜町) 浦明 大蔵ほか	丘陵	35373343	134553487	12					24, 34a, 34b
35	椎ノ坪	京丹後市 (旧熊野郡久美浜町) 一分 椎ノ坪	丘陵?	35363301	134571099	23					24
36	岡畑	豊岡市香住町 (旧城崎郡香住町) 森	河岸段丘	35372826	134373324	19					36
37	松村	美方郡新温泉町 (旧美方郡浜坂町) 田井松村	不詳	35372975	134283543	38					37
38	中谷貝塚	豊岡市中谷殿替	低地	35315472	134510922	6					38
39	加陽	豊岡市加陽宮ノ下	河床	35303774	134493813	5					38
40	駄坂川原	豊岡市駄坂中川	河床	35305123	134504809	2					38, 40
41	駄坂舟隠	豊岡市駄坂舟隠	丘陵上	35305583	134505548	40				Ⅱ期初頭墳墓群	38, 41
42	香住荒原	豊岡市香住荒原	丘陵裾	35303815	134510554	5					38
43	荒木	豊岡市 (旧出石郡出石町) 口小野荒木	扇状地	35295640	134522437	10					43
44	宮内黒田	豊岡市 (旧出石郡出石町) 宮内	扇状地	35285346	134520640	8					40, 44
45	瀬布ヶ森西	豊岡市 (旧城崎郡日高町) 瀬布 (弥布)	段丘	35281835	134460736	30					45
46	久田谷	豊岡市 (旧城崎郡日高町) 久田谷	段丘	35274982	134443357	58					46
47	東家の上	養父市 (旧養父郡八鹿町) 小山東ノ上	丘陵上	35235717	134452461	90				Ⅱ期初頭段澤と住居	40, 47
48	耳堂	養父市 (旧養父郡) 関宮町三宅耳堂	段丘	35230945	134414122	129					40, 48
49	前川向	養父市 (旧養父郡関宮町) 三宅前川向	段丘	35225565	134414760	120					40, 48
50	門口	養父市 (旧養父郡関宮町) 吉井門口	段丘	35220300	134374504	222					40, 48
51	岡梨	養父市 (旧養父郡大屋町) 蔵垣岡梨	段丘	35193983	134381950	187					40, 48
52	高瀬	朝来市 (旧朝来郡和田山町) 高瀬	段丘	35212470	134492245	67					40
53	加都	朝来市 (旧朝来郡和田山町) 加都	扇状地内段丘	35185385	134504562	88					53a, 53b
54	筒江片引	朝来市 (旧朝来郡和田山町) 筒江	段丘	35184672	134510848	95					54
55	筒江浦石	朝来市 (旧朝来郡和田山町) 筒江浦石	段丘	35183724	134512467	106					55

番号	遺跡名	所在地	立地	北緯	東経	遺構面 標高 (m)	船・I古 滋IV長中	I新	特記	文献
56	森犬野	養父市 (旧養父郡養父町) 森犬野	段丘	35192114	134442423	152				40
57	野外	養父市 (旧養父郡養父町) 建屋	段丘	35180591	134442515	173		不詳		
58	広瀬	養父市 (旧養父郡養父町) 建屋	段丘	35174193	134443377	181		不詳		
59	安井	朝来市 (旧朝来郡和田山町) 安井	段丘	35183318	134495195	109				40
60	ムクノ木	朝来市 (旧朝来郡和田山町) 久世田ムクノ木	不詳	35173331	134493869	109		不詳		60
61	栗鹿	朝来市 (旧朝来郡山東町) 栗賀	扇状地内段丘	35180979	134542251	140				61
62	浦入	舞鶴市千歳 小嶋ほか	海岸	35312498	135202791	0		弥生・縄文		62a-62c
63	八雲	舞鶴市丸田 上平方ほか	河床	35275587	135165600	3		不詳		63
64	志高	舞鶴市志高 カギ安 舟戸ほか	自然堤防	35253326	135145570	4		I期ピット		64a, 64b
65	三河宮の下	福知山市 (旧加佐郡大江町) 三河 高畠	河岸段丘	35243600	135112384	7				65
66	武者ヶ谷	福知山市堀武者ヶ谷	丘陵端	35170399	135073848	49				66
67	館	綾部市館 宮ノ前・シボラ・下館・宮ノ東	台地	35194294	135125669	39		不詳		31
68	馬場池東方	綾部市私市 桜谷	丘陵腹	35190455	135115374	74		採集のみ		68a, 68b
69	小貝	綾部市小貝 新八	河岸段丘	35184664	135114611	36		土坑		69
70	観音寺	福知山市観音寺	自然堤防	35182901	135113108	25		晩期土坑・土器棺		70
71	味方	綾部市味方	自然堤防	35173058	135160290	46				71
72	荒堀遺跡	福知山市 (旧天田郡夜久野町) 大油子荒堀	平地	35201500	134562900	115				72
73	菖蒲池	福知山市 (旧天田郡夜久野町) 平野菖蒲池	台地	35202518	134554441	143		晩期住居?		73
74	高坂西	丹波市市島町 (旧米上郡市島町) 中竹田高坂	高位段丘	35143698	135072832	73				74
75	上ノ段	丹波市市島町 (旧米上郡市島町) 上竹田上ノ段	下位段丘	35133560	135074494	57				75
76	的場	丹波市市島町 (旧米上郡市島町) 上竹田的場・柳溝	扇状地	35134724	135074249	62				75
77	春日七日市	丹波市春日町 (旧米上郡春日町) 七日市	沖積扇状地	35095268	135065480	82				77

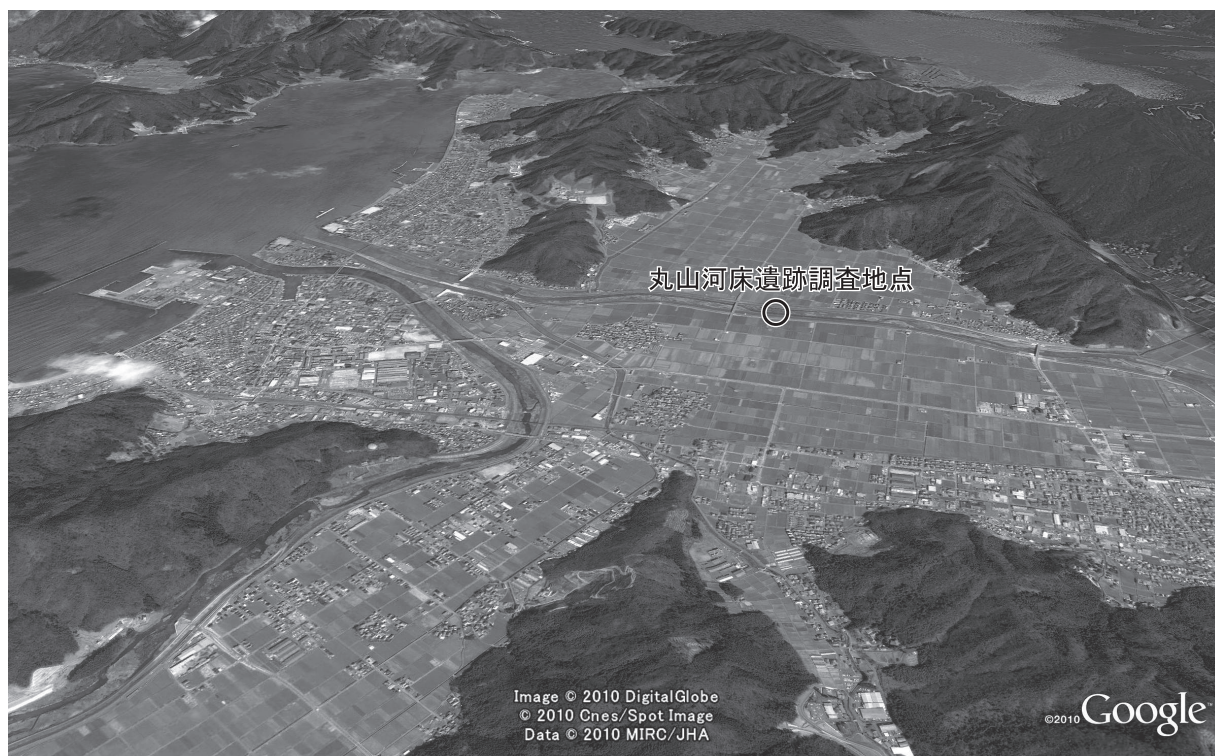
* 北緯・東経は世界測地系で、a度b分cd. ef秒→abodefとして表記

<表3 参考文献>

- 1 a 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1988 『第3回福井県発掘調査報告会資料－昭和62年度に発掘調査された遺跡－』
- 1 b 小浜市史編集委員会1992 『小浜市史』 通史編上巻
- 2 a 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2006 『第21回福井県発掘調査報告会資料－平成17年度に発掘調査された遺跡－』
- 2 b 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2007 『第22回福井県発掘調査報告会資料－平成18年度に発掘調査された遺跡－』
- 2 c 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『第23回福井県発掘調査報告会資料－平成19年度に発掘調査された遺跡－』
- 3 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 『第24回福井県発掘調査報告会資料－平成20年度に発掘調査された遺跡－』
- 4 a 若狭考古学研究会1971 「若狭湾の遠賀川式土器－資料紹介－」(若狭考古学研究会報告3 『浜裾遺跡』 所収)
- 4 b 大飯町教育委員会1985 『大島浜裾・宮留遺跡』(大飯町文化財調査報告第4集)
- 4 c 若狭考古学研究会1986 『大島宮留遺跡』(若狭考古学研究会研究報告6)
- 6 若狭考古学研究会1974 『吉見浜遺跡－若狭における土器製塩遺跡の研究』(若狭考古学研究会研究報告5)
- 8 鳥浜貝塚研究グループ1985 『鳥浜貝塚1984年度調査概報・研究の成果－縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査5－』
- 9 三方町教育委員会1996 『ユリ遺跡』三方町文化財調査報告書第14集
- 10 三方町教育委員会1990 『江跨遺跡』三方町文化財調査報告書第9集
- 11 三方町教育委員会1988 『田名遺跡』三方町文化財調査報告書第8集
- 12 美浜町誌編集委員会2009 『わかさ美浜町誌』第6巻(掘る・使う) p.84図2
- 13 敦賀市教育委員会2004 『市内遺跡調査報告－宮山古墳群・公文名遺跡・木崎山南遺跡・柳川鉢谷遺跡等－』
- 14 斎藤優1970 『若狭上中町の古墳』
- 15 福井県立若狭歴史民俗資料館1999 『若狭の古代遺跡－発掘の成果と出土品－』(特別展図録) 8頁写真
- 16 中司照世2008 「坂ノ下遺跡の調査」『坂ノ下遺跡群』(一般国道8号敦賀バイパス関係遺跡調査報告書第1集) 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 17 岸岡貴英1992 「下畑遺跡平成3年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』47 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 18 森正1993 「国道176号関係遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』54 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 19 岩松保・肥後弘幸2010 「温江遺跡第6次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』139 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 20 a 石尾政信2001 「1. 沖田遺跡第2次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』99 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 20 b 中川和哉・山口早苗・松田早映子2001 「沖田遺跡出土の縄文・弥生土器」『京都府埋蔵文化財情報』 第82号
- 21 a 堅田直1966 『京都府丹後町平遺跡調査概要』 帝塚山大学考古学シリーズ1
- 21 b 河野一隆1997 「平遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』79 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 22 a 同志社大学考古学研究会 1965 「丹後町竹野川流域の古代遺跡分布調査」『同志社考古』 5
- 22 b 丹後町教育委員会 1983 『丹後竹野遺跡』京都府丹後町文化財調査報告2
- 22 c 丹後町教育委員会1987 『竹野遺跡』京都府丹後町文化財調査報告3
- 22 d 丹後町教育委員会1992 『竹野遺跡発掘調査概要』丹後町文化財調査報告10
- 22 e 丹後古代文化研究会1992 『竹野弥生遺跡』
- 22 f 村田行弘1996 「竹野遺跡第9次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』69 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 22 g 丹後町教育委員会1996 『竹野遺跡発掘調査概要』京都府丹後町文化財調査報告11

- 22 h 田代弘2003「竹野遺跡・宮遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』107 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 24 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター編1989『京都府弥生土器集成』
- 25 a 古代学協会1985『奈良岡遺跡発掘調査報告書』
- 25 b 弥栄町教育委員会1986『奈良岡遺跡第3次発掘調査報告書』
- 25 c 筒井崇史1999「奈良岡遺跡第9次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』87 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 26 a 神尾恵一1972「京都府竹野川流域(中郡)の弥生式遺跡－分布調査による報告2－」『同志社考古』9
- 26 b 峰山町教育委員会1975『扇谷遺跡発掘調査報告書』峰山町文化財調査報告書2
- 26 c 峰山町教育委員会1988『扇谷遺跡発掘調査報告書』峰山町文化財調査報告書12
- 27 峰山町教育委員会1982『七尾遺跡発掘調査報告書』峰山町文化財調査報告書8
- 28 小江慶雄1957「丹後古代文化の源流－竹野川流域の弥生式文化を中心として－」『京都学芸大学学報A』No.11
- 29 a 峰山町教育委員会1977『途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書』峰山町文化財調査報告書3
- 29 b 峰山町教育委員会1981『途中ヶ丘遺跡発掘調査概報(Ⅱ)』峰山町文化財調査報告6
- 29 c 加悦町教育委員会1999『丹後の弥生社会を断る』(第4回加悦町文化財シンポジウム資料)
- 30 網野町教育委員会1977『林遺跡発掘調査報告書』網野町文化財調査報告書1
- 31 横山浩一・佐原眞1960『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第1部日本先史時代
- 32 a 繹龍雄・林和廣1968「京都府網野町松ヶ崎遺跡調査報告」『史想14』京都教育大学考古学研究会
- 32 b 村田和弘1997「松ヶ崎遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概要』75 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 32 c 戸原和人1998「松ヶ崎遺跡第5次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』82 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 33 a 梅原未治1920「漆村函石浜石器時代の遺跡」『京都府史蹟勝地調査会報告』2 京都府
- 33 b 梅原未治1922「漆村函石濱石器時代遺跡(補遺)」『京都府史蹟勝地調査会報告』3 京都府
- 33 c 松木勇・直良信夫1929「丹後国函石浜遺蹟の調報」『考古学雑誌』19-11
- 34 a 関西考古学研究者連合1973『京都府久美浜町浦明遺跡調査報告書』1
- 34 b 久美浜町教育委員会1980『浦明遺跡』久美浜町文化財調査報告3
- 36 大乘寺埋蔵文化財調査団1999『岡畑遺跡－重要文化財大乘寺収蔵庫建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－』
- 37 日高町1980『日高町史』資料編
- 38 豊岡市1993『豊岡市史』史料編下巻
- 40 但馬考古学研究会1982『但馬考古学』1
- 41 豊岡市立郷土資料館1989『駄坂・舟隠遺跡群』
- 43 出石町1993『出石町史』第四卷(資料編Ⅱ)
- 44 出石町1987『出石町史』第三卷(資料編Ⅰ)
- 45 日高町教育委員会1976『但馬・欄布ヶ森西遺跡調査報告書－312号線日高バイパスに伴う発掘調査－』(日高町文化財調査報告書第2集)
- 46 日高町教育委員会1985『久田谷遺跡』(日高町文化財調査報告書第6集)
- 47 八鹿町教育委員会1990『小山古墳群・東家の上遺跡』(八鹿町文化財調査報告書第9集)
- 48 高松龍暉1978「考古学から見た関宮町」『関宮町史資料集(1)』

- 53 a 兵庫県教育委員会2005『加都遺跡Ⅰ－播但連絡有料道路5期併合工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（兵庫県文化財調査報告285）
- 53 b 兵庫県教育委員会2007『加都遺跡Ⅱ－一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』（兵庫県文化財調査報告324）
- 54 兵庫県教育委員会1985『筒江遺跡群Ⅰ－和田山工業団地建設に伴う発掘調査報告－』（兵庫県文化財調査報告31）
- 55 兵庫県教育委員会2007『筒江浦石遺跡－一般国道483号北近畿豊岡自動車道（春日和田山道路Ⅱ）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』（兵庫県文化財調査報告316）
- 60 関西縄文研究会2007『関西の突帯文土器』（第8回関西縄文文化研究会資料集）
- 61 兵庫県教育委員会2007『栗賀遺跡－一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－Ⅱ』（兵庫県文化財調査報告323）
- 62 a （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001『京都府遺跡調査報告書』29・浦入遺跡群
- 62 b 舞鶴市教育委員会2001『浦入遺跡群発掘調査報告書』遺構編（舞鶴市文化財報告第33集）
- 62 c 舞鶴市教育委員会2002『浦入遺跡群発掘調査報告書』遺物図版編（舞鶴市文化財報告第36集）
- 63 小江慶雄1962「舞鶴市八雲地先由良川河底出土の先史遺物について」『京都学芸大学紀要A』No.21 京都学芸大学
- 64 a 舞鶴市教育委員会1983『志高遺跡－昭和57年度カキヤ安地区の調査－』京都府舞鶴市文化財調査報告4
- 64 b （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989『京都府遺跡調査報告書』12・志高遺跡
- 65 竹原一彦1982「三河宮ノ下遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』2（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 66 渡辺誠・鈴木忠司1977『武者ヶ谷遺跡発掘調査報告書』福知山市文化財調査報告書3
- 68 a 黒坪一樹1989「（6）馬場池東方遺跡」『京都府遺跡調査概報』36（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 68 b 田代弘1990「綾部市馬場池東方遺跡出土遺物について」『京都府埋蔵文化財情報』37
- 69 黒坪一樹1985「（1）小貝遺跡」『京都府遺跡調査概報』31（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 70 伊野近富・黒坪一樹2005「観音寺遺跡平成15年度発掘調査概要」『「京都府遺跡調査概報」115（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 71 辻本和美・森下衛1986「味方遺跡第2次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』18（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 72 伊野近富1982「稚見野遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』2（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 73 夜久野町教育委員会1973『夜久野ヶ原 菖蒲池遺跡発掘調査報告書』夜久野町埋蔵文化財発掘調査報告1
- 74 兵庫県教育委員会2005『高坂古墳群－国道175号竹田バイパス公共特殊改良一種事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－』（兵庫県文化財調査報告第281冊）
- 75 兵庫県教育委員会2002『的場遺跡・上ノ段遺跡－（国）175号特殊改良第一種事業に伴う発掘調査報告書－』（兵庫県文化財調査報告第225冊）
- 77 兵庫県教育委員会1990『春日・七日市遺跡（Ⅰ）－第2分冊－（弥生・古墳時代遺跡の調査）近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書XⅡ－2』（兵庫県文化財調査報告第72－2冊）



1 小浜平野と丸山河床遺跡（Google Earthで南方上空からに設定）



2 丸山河床遺跡付近の近況（2007年12月撮影・北川北岸から南方の府中石田遺跡方面を望む）

図版 2



1 調査地付近全景（南東から）



2 河床内堆積状況（その1）



3 河床内堆積状況（その2）



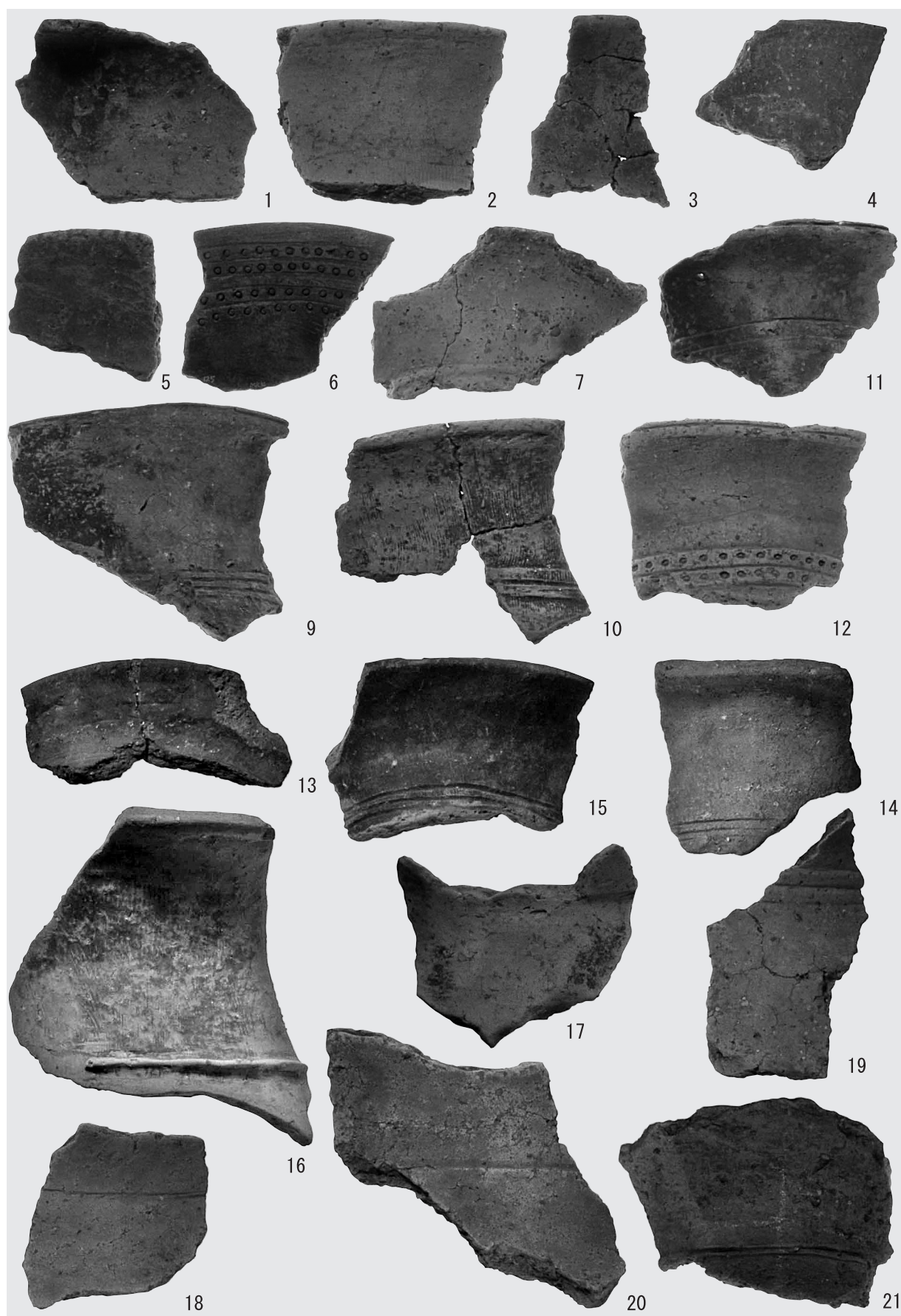
4 河床内堆積状況（その3）



5 遺物出土状況（その1）

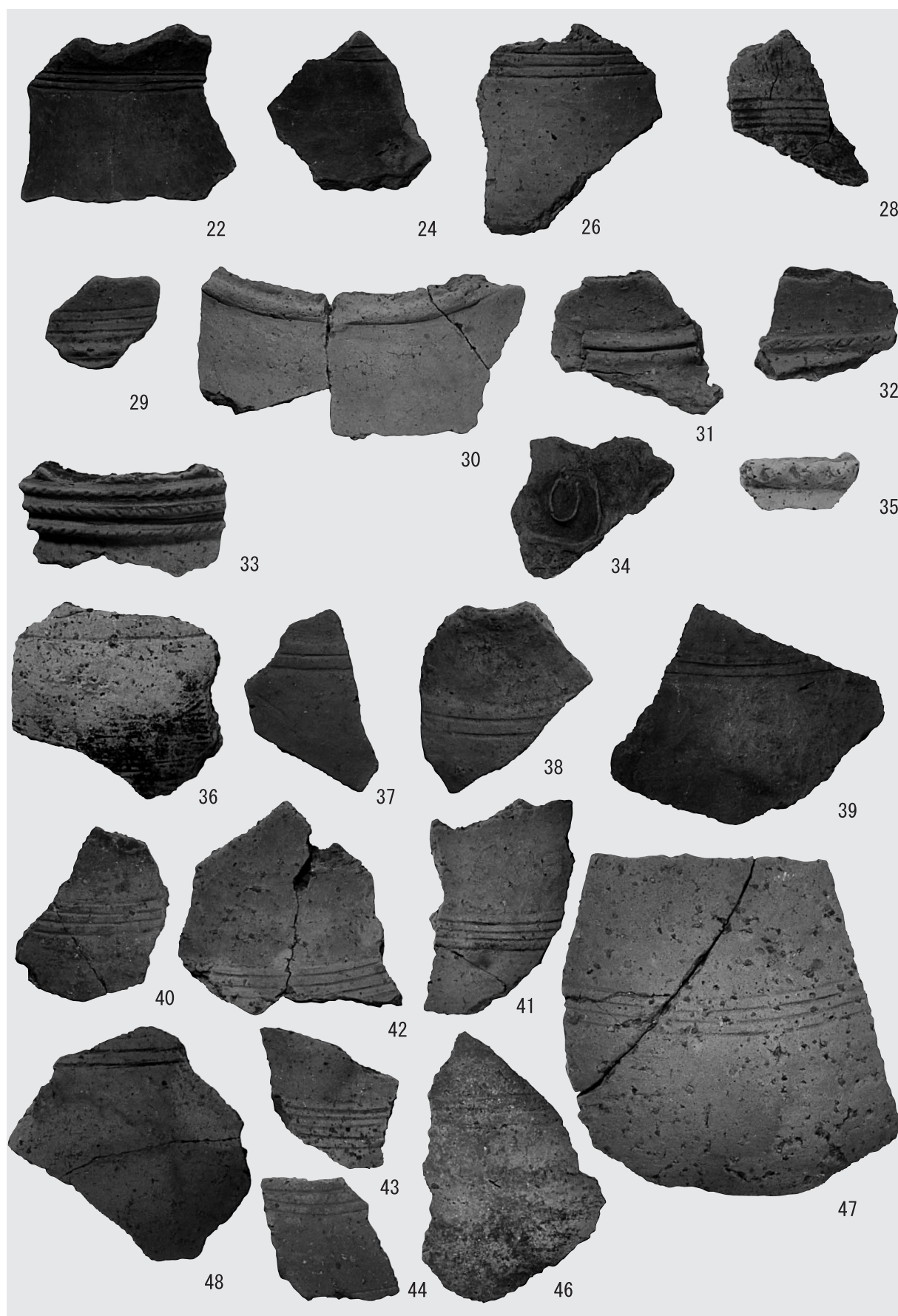


6 遺物出土状況（その2）

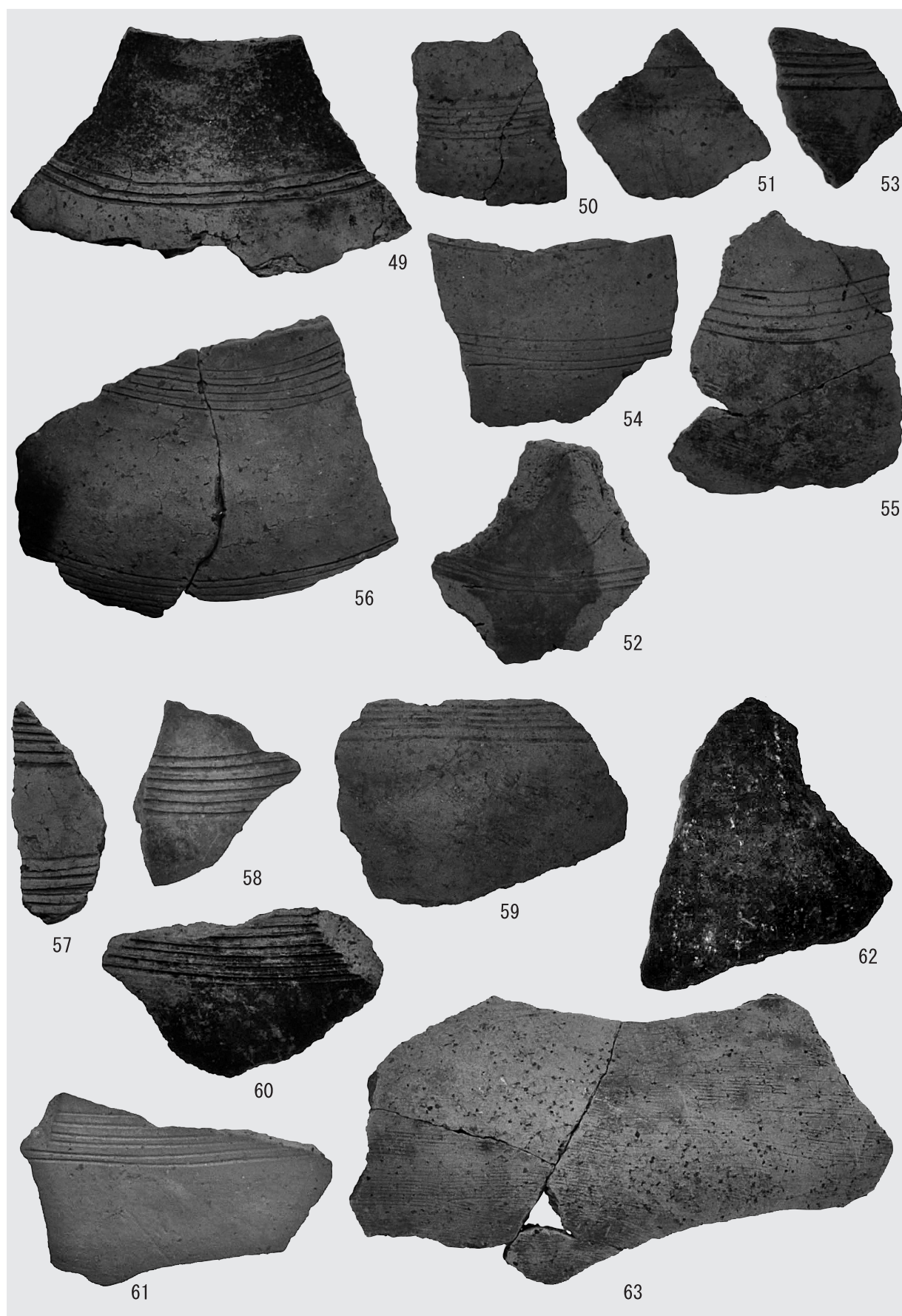


弥生時代前期の土器（その1） 縮尺約1/2

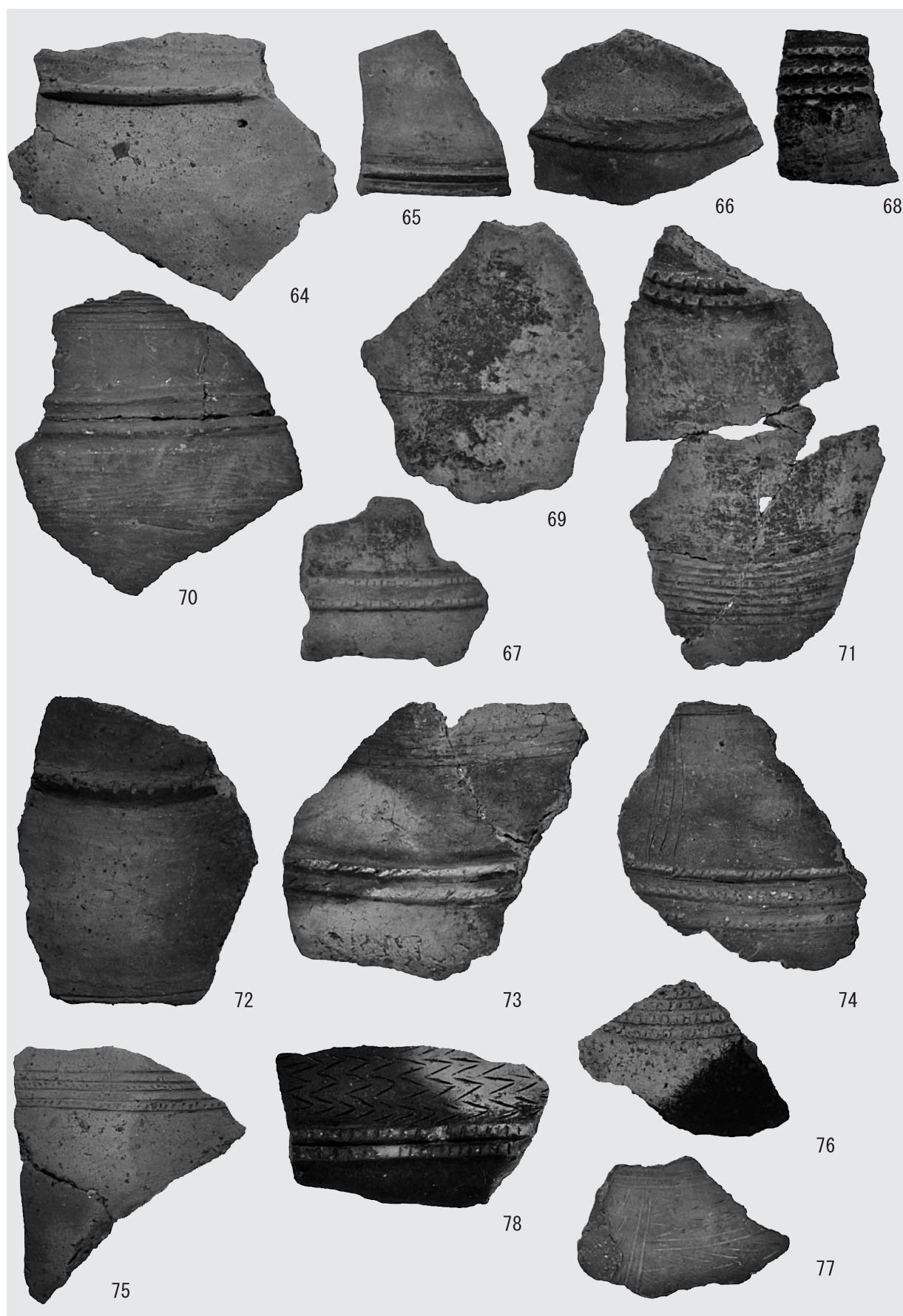
図版 4



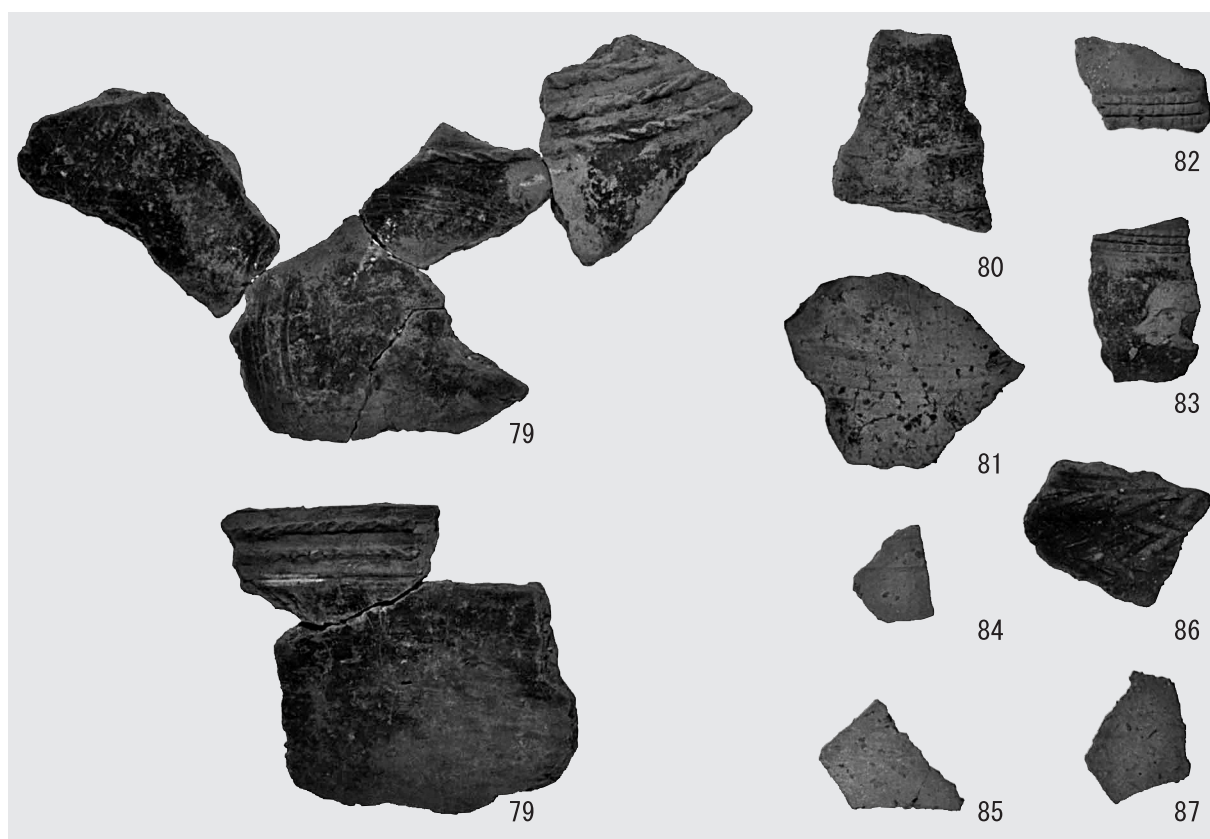
弥生時代前期の土器（その2） 縮尺約1/2



弥生時代前期の土器（その3） 縮尺約1/2



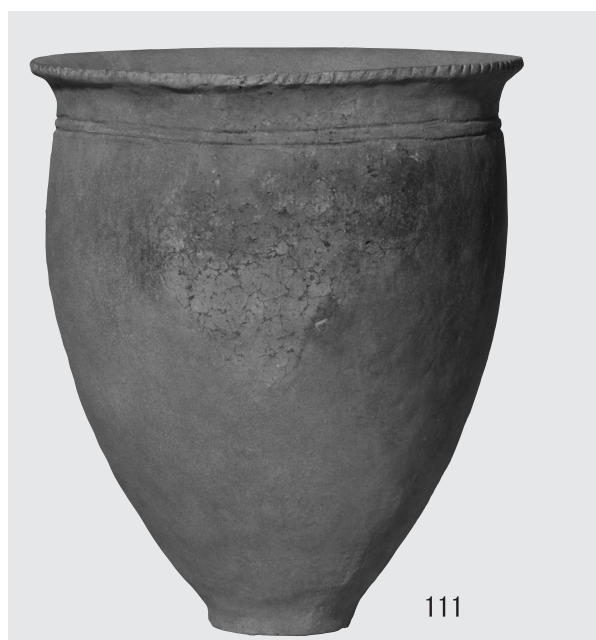
弥生時代前期の土器（その4） 縮尺約1/2



1 弥生時代前期の土器（その5） 縮尺約1/2

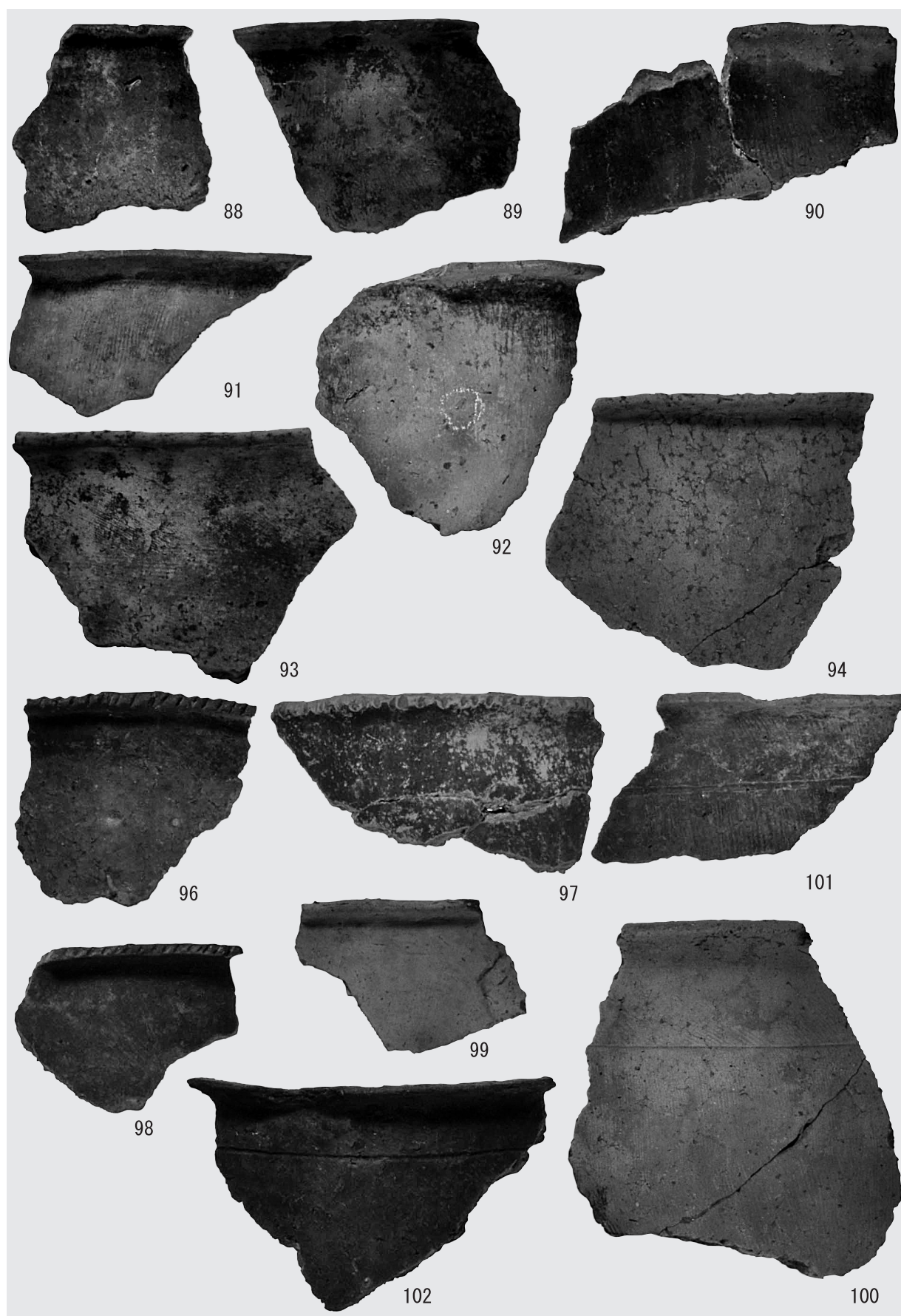


※口縁～頸部・胴下半部は復元

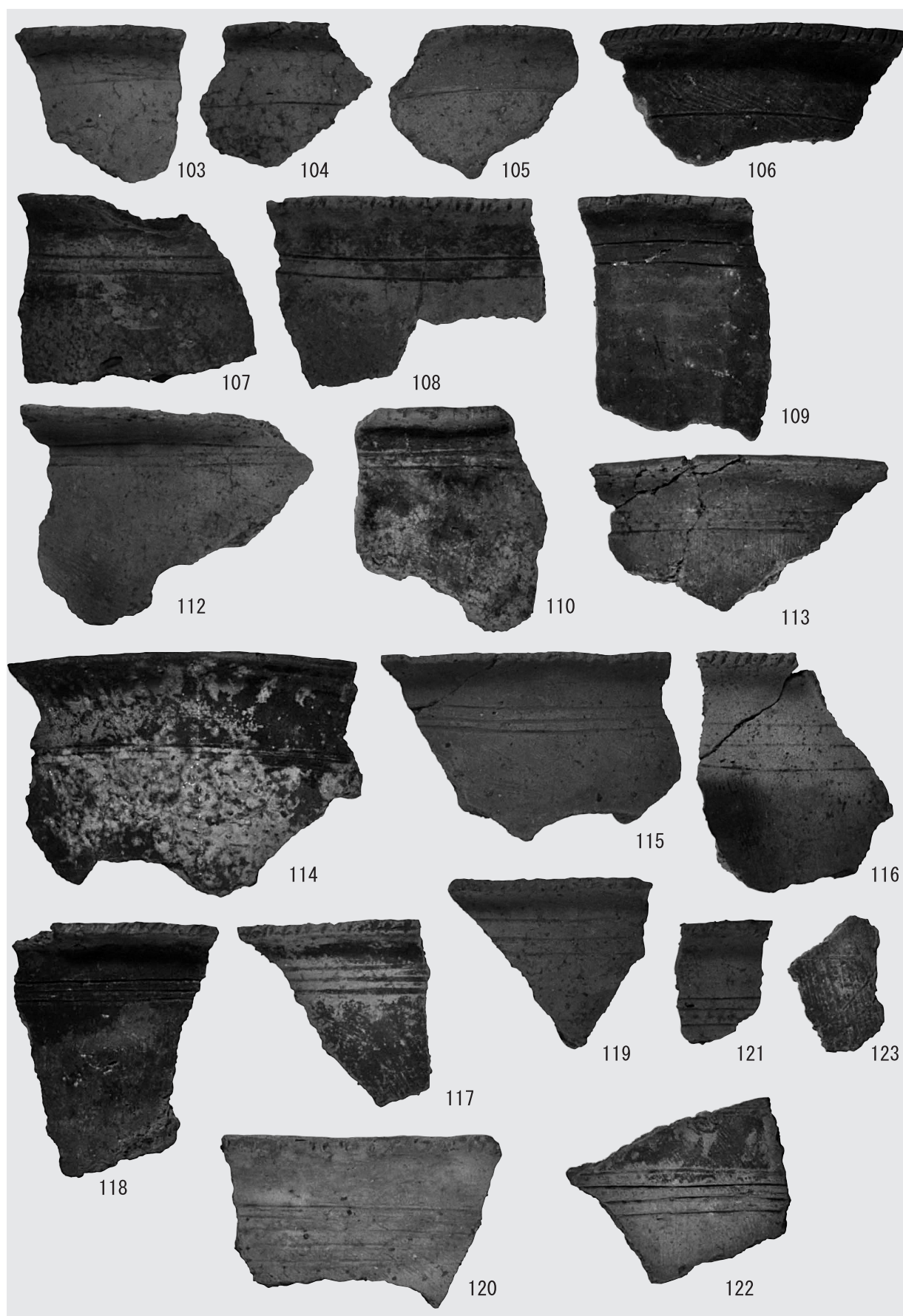


※胴下半部は復元

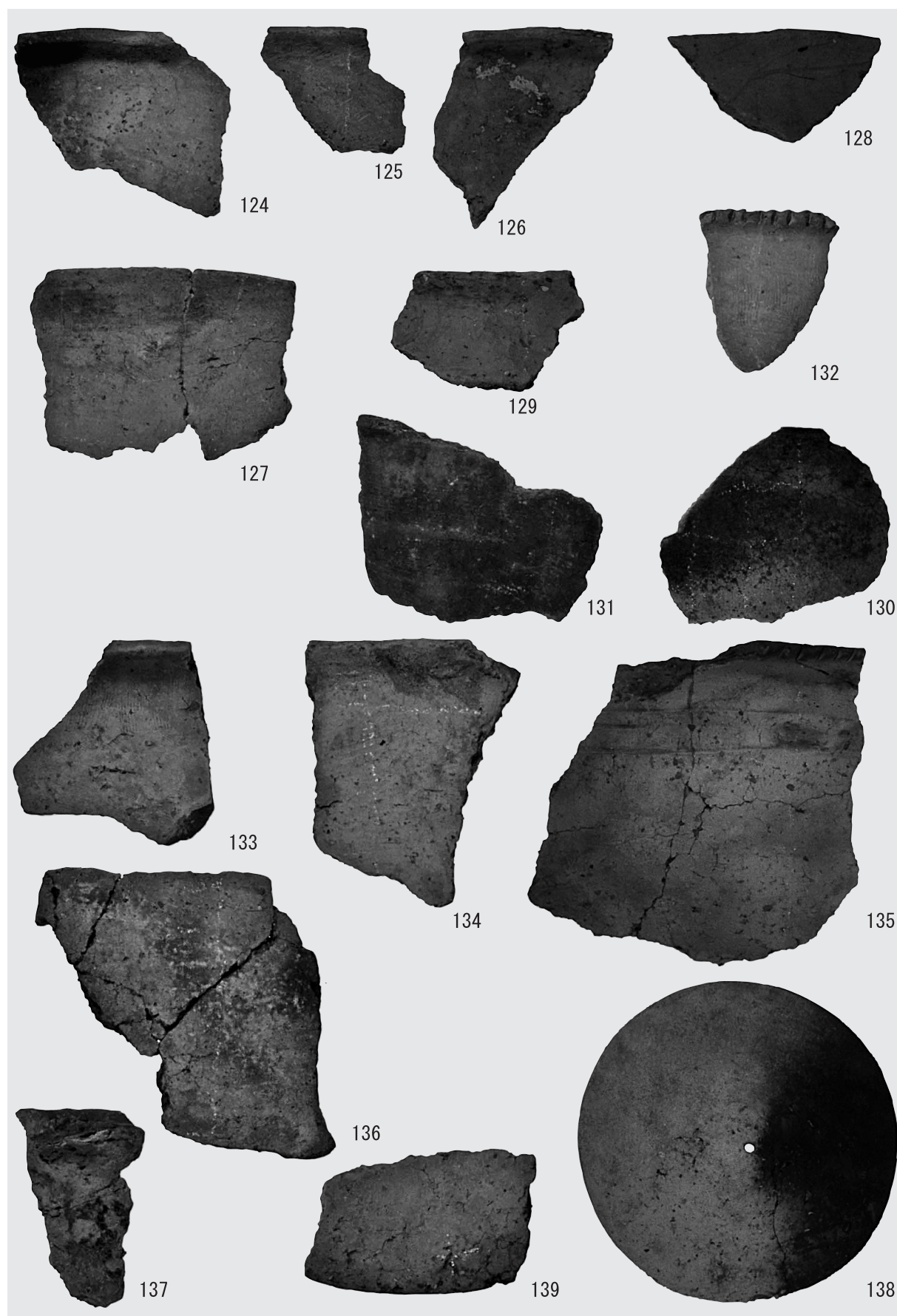
2 弥生時代前期の土器（その6：福井県立若狭歴史民俗資料館復元展示品） 縮尺約1/2



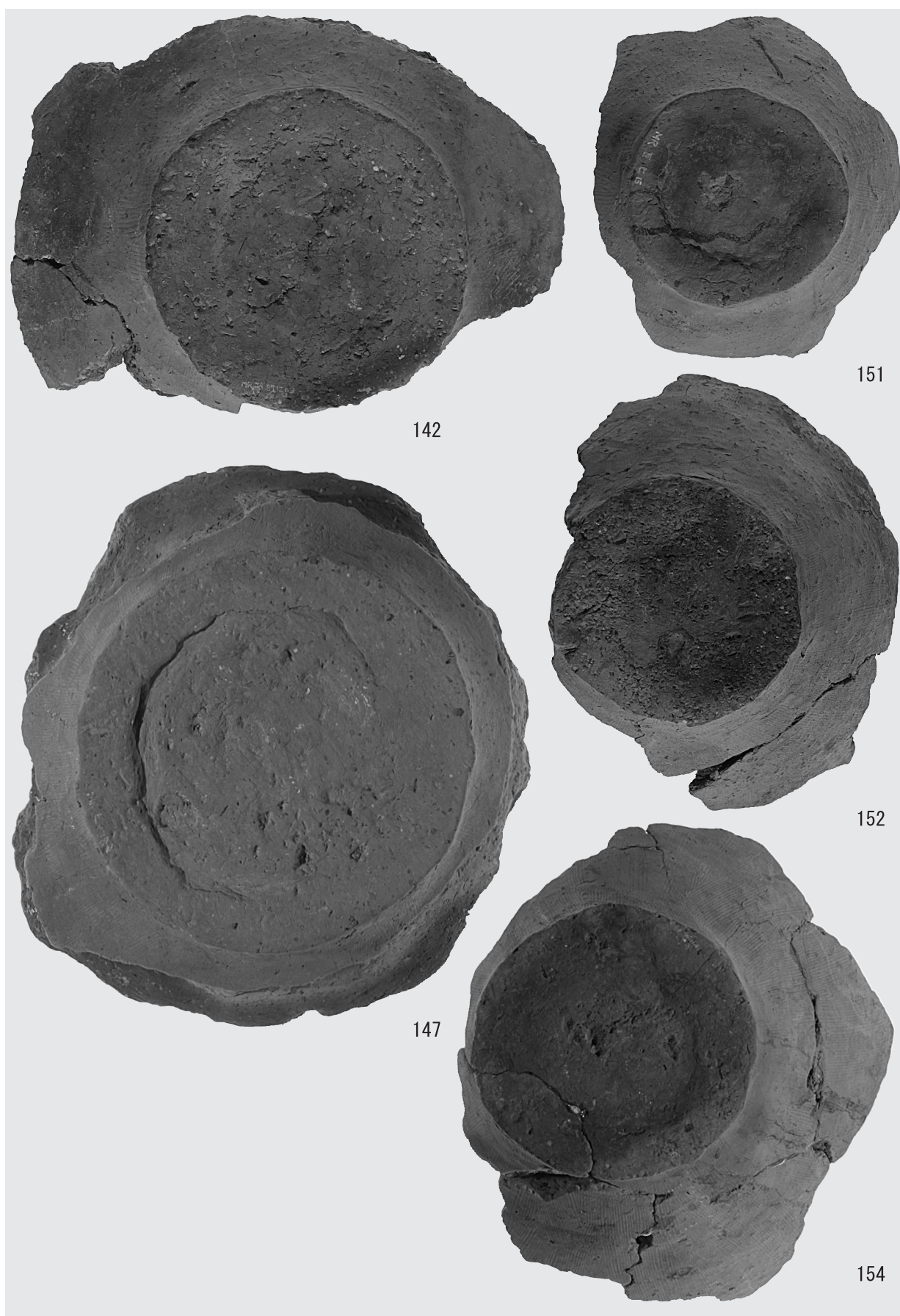
弥生時代前期の土器（その7） 縮尺約1/2



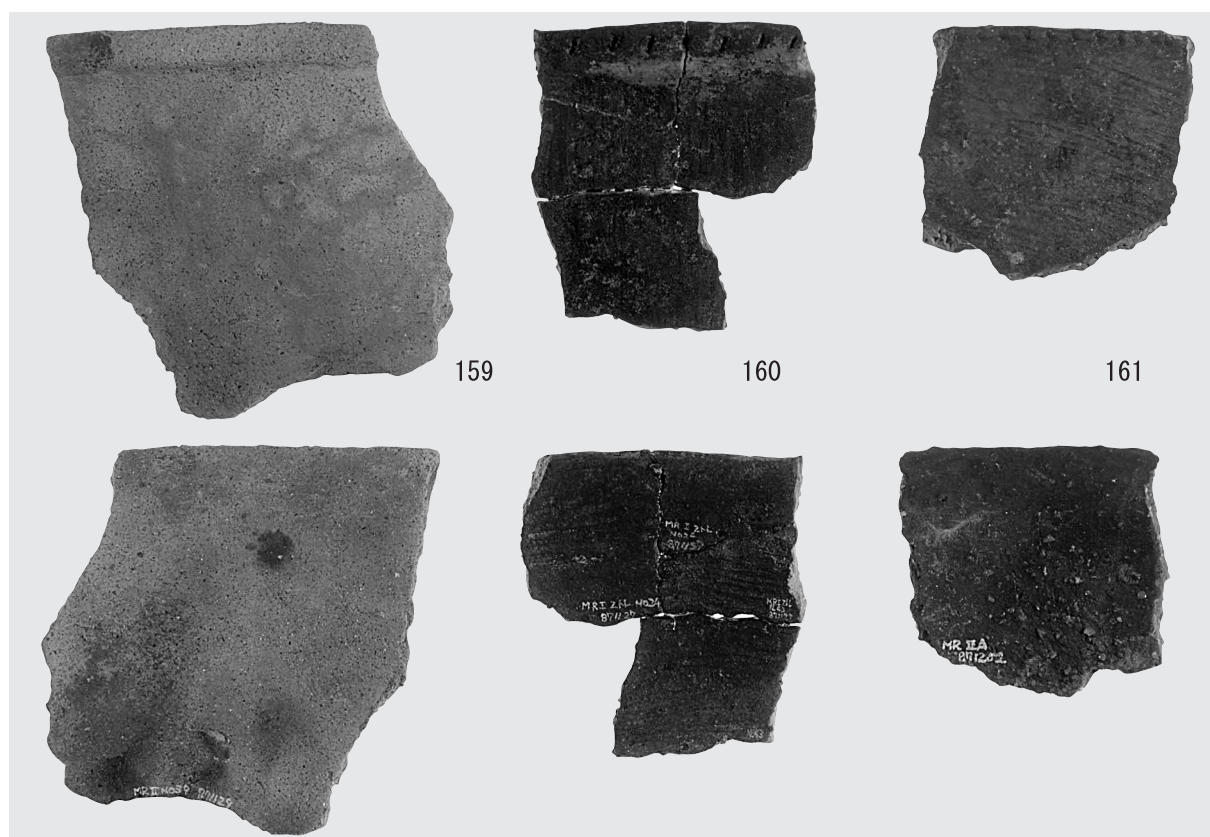
弥生時代前期の土器（その8） 縮尺約1/2



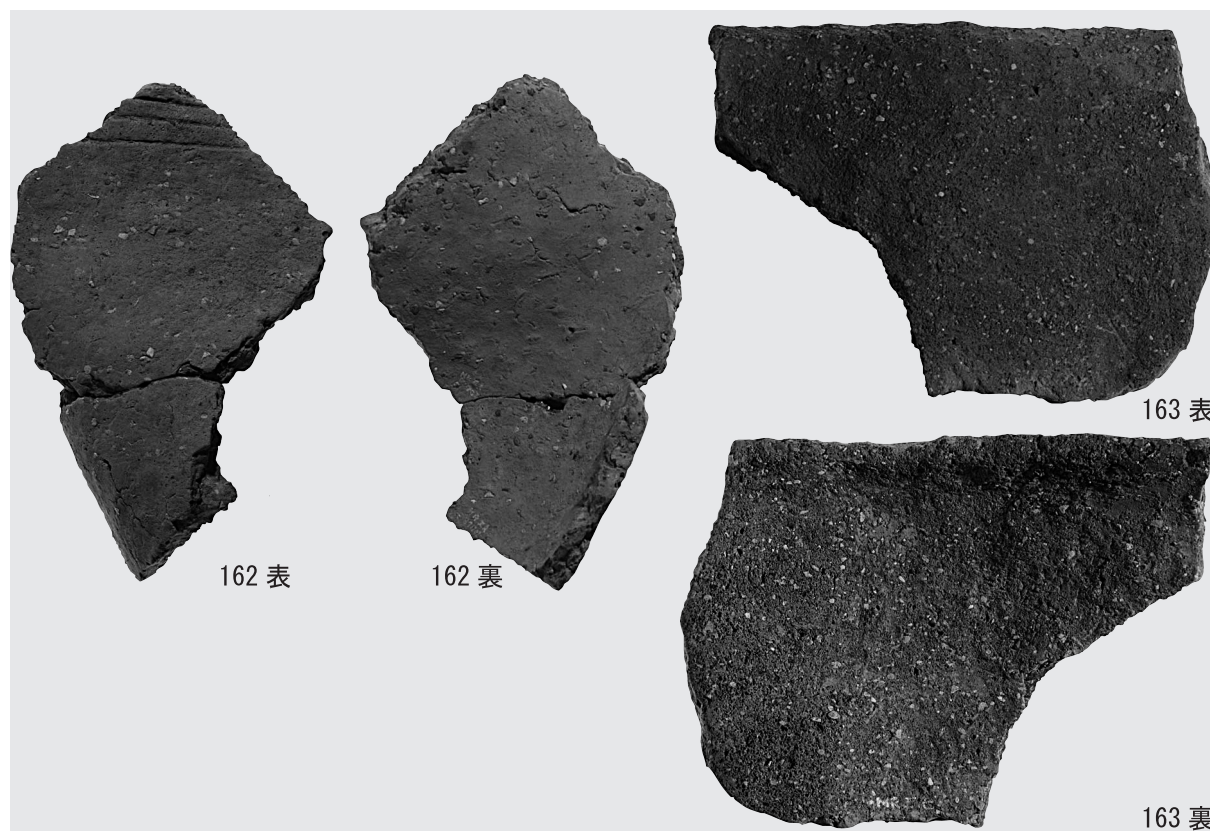
弥生時代前期の土器（その9） 縮尺約1/2



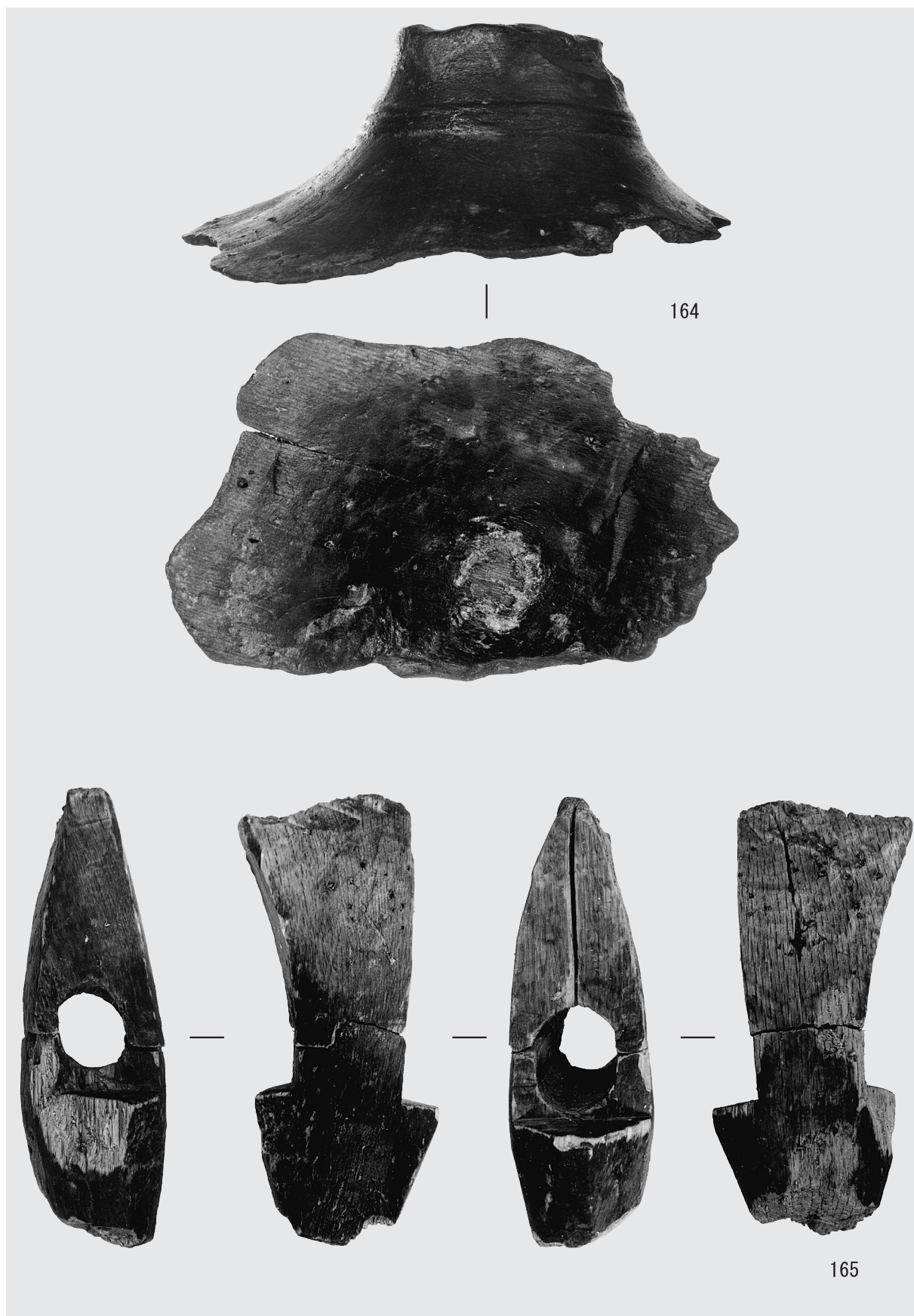
弥生時代前期の土器（その10） 縮尺約1/2



1 突帯文・条痕文系土器（上段が表面・下段が裏面） 縮尺約1/2



2 被熱変形土器片 縮尺約1/2



木製品 縮尺約1/3